

花音ちゃん

あ、そでぽ



ふたなり魔女先生は  
天使な花音ちゃんを  
ぐちよんぐちよんにする夢を見るか







花音ちゃん

あええ  
ぽ



「え……？ 能見先生、今日、お休みなんですか？」

いつものようにせんせーに挨拶しようとして花音が保健室を訪れると、そこには代理の先生がいて、絵里衣の姿はなかった。

「風邪……ですか。そうなんだ……」

昨日の夜、お休みなさいってメッセージを送ったときは、そんな話してなかったと思うのだけど……。

「あ、いえ、特に用事があった訳じゃないんです。すみません、ありがとうございます」

相談事なら聞こうか？ と優しく語りかけてくれた代理の先生にぺこりと丁寧なお辞儀をして保健室を退出する花音。

「ねえ、保健室の能見先生またお休みなんだね」

「先生大体一月に一度は休んでるよね」

「生理が重いのかな？」

「なんかさ、あたし、ちょっと聞いたんだけど、先生をヤバい場所で見たとあるって言うてる子がいたんだよね」

「ヤバい場所ってどこよ？」

「え……うーん、それはわかんないんだけど……」

そんな花音の前をきゃいきゃいと楽しげに過ぎ去っていく女の子達。

「でもさあ、先生時々怪我とかしてるよね」

「ああ、それ知ってる！ なんかお酒呑んで酔って転んだとか言ってたけど……」

「でも、あの先生だったらほんとに酔っ払って転んでそう」

「あはっ……！ そんなこと言ったら悪いって……ふふ……」

「そういうアンタも笑ってるじゃない」

能見絵里衣は少しミステリアスな美人で、話のわかる保健の先生ということで生徒たちにとても人気がある。

ただ、そういう話を聞くと花音はついつい子供っぽい嫉妬心を燃やしてしまい、モヤモヤとしてしまうことがあった。

「うーん、ダメだなあ、わたし」

そんな自分のことがあんまり好きではないけど、それが自分なのだから仕方がない。

「しっかりしなさい」

こつんって自分で軽く頭を叩いて、それからスマホを取り出す。

「学校じゃ使っちゃいけないことになってるけど……お見舞いのメッセージくらい、いいよね？」

きよろきよると当たりを見回して誰もいないことを確認して、『大丈夫ですか？ 学校終わったらお見舞いに行つて良いですか？』とメッセージを送る。

そのお返事は随分とたつてから、放課後によろやく届いたけれど——

『先生は大丈夫。それより風邪がうつるといけないから、絶対に来ちゃダメだからね』

——

——特におかしいことのないそのメッセージが妙に気になって。

結局、先生の言いつけに逆らって、花音はお見舞いに行くことにしたのだった。

## II

「ふえ……」

突然目の前にまろびでた『それ』に、花音の意識は一瞬フリーズした。

「え……？　こ……れ……？　？　？　？　？」

それは少女にとつてあまりに馴染みのない、実物を見るのはほぼ初めての  
のようなシロモノ。

「あら？　もしかして花音ちゃん、おちんちん見るの初めて？」

「おち……？　えっ!?　ええっつ！　ど、どうしてっつっ!?」

「ふふ、びつくりさせちゃったかしら」

おちんちん……いわゆる男性器。保健体育の授業で習ったことはあるし、教科書には割と生っぽい写真が掲載されていたと思う。3年くらい前まではパパとお風呂に入っていたけど、その時にもまあ、チラッと視線の先に入ったことはある。

でも……。

「だ、だってせんせ、女の人……え？　それに、こんな大きくて……あ、あれ……？　なんで？　え？　おち……あれ？　え、えええ……っ?」

花音の混乱は当然だ。まず、彼女はこんなに大きなおちんちん……男性器を間近で見たことなんてない。勃起……つまり、『大きくなった様子』は確か教科書か、好奇心で調べた本だったかは忘れたけど見たことがあったけど、『こんなに』威圧感を覚えるほどには大きくはなかった。もっとうしろ、なんといいのか『常識的』な大きさだったはずだ。

それに何より花音が一番驚き、混乱し、パニック状態になってしまっ

たのは、どうして女性なはずの絵里衣に『そんなもの』が生えているのかということだった。

「あら、花音ちゃん。女の人の中にはおちんちんが生えてる人だっているのよ」

「そ、そうなの!?　で、でも、せんせー、お風呂一緒に入った時は……」

「ふふ、そうね。私のおちんちんを花音ちゃんに見せるのは初めてよね」

「だ、だよね？　だよね？」

あつげらかんと応える絵里衣に、花音はなんとか頭の混乱を抑えようと何度も何度も頷く。それは肯定しているというよりは無理にでも理解しようとしている仕事。

「先生ね、月に一度くらいかなあ、こんな風におちんちんが生えちゃうことがあるのよ」

「は、生えちゃう!?　え……と……んんっ……だ、男性器ってそういうもの……なんですか？」

「花音ちゃん。男性器なんて他人行儀な呼び方しないで。これはね、おちんちん・ちん♪」

「お……おち……」

「恥ずかしくなくていいの。うーん、そうね、別の呼び方の方がいいやすいかな。例えば、おちんちん……とか」

「い、いえないよお、そんなの」

「それじゃあ、ペニスとか……イチモツとか？　他にも色々あるけど、うん、好きなので呼んでくれたらいいから」

「そ、そういうのじゃなくて……」

別に花音は『それ』を何と呼べばいいのか悩んでいるわけではない。いや、それも悩みの種の一つではあるが、今考えるべきはそれじゃない。

「な、なんで……」

月に一度くらい生えちゃうことがある、なんて言われても『ああ、そうなんだー』とはならない。でも、絵里衣の股間からは確かに男性器がそそり立っていて、血管がビキビキと浮かび上がって花音の拳ぐらいに大きくなっていて、先端からなにやら透明な汁のようなものを滲ませつつ、かすかにびくと震えていた。

「おちんちんが生えちゃうとね、先生、色々我慢出来なくなっちゃうの」  
そういうつつ、自分の剛直を指差す。

「それなのに、今日は花音ちゃんがお見舞いに来てくれたから。ほら、先生期待しちゃってすごいことになっちゃったの。ほら、見て？ バキバキになってる」

「え……う……えう……ええつと……その……み、見せないで……」

おでこに触れてしまいそうなほどに近づけられたペニスから目を逸らし、顔を背けようとする。だけど絵里衣はそんな視線を追いかけるように腰をくねらせ、自分の肉棒を見せつけていく。

「ねえ、花音ちゃん。私、言ったわよね」

口角を持ち上げ意地悪な笑みを浮かべる。

「今日は絶対に私のところにきちやダメだって、そう言ったわよね？」  
くすくすと楽しそうに囁く。

「それなのに花音ちゃんは来ちゃったんだ。あーあ」

大げさに、芝居がかかった感じの声をあげる。

「それは、その、わたし……せんせーのことが心配で……」

「ふうん、そうなんだあ。花音ちゃんは優しいわね。先生、そんな花音ちゃんのこと大好きだなあ」

そう言いつつ、おでこをぺちぺちと勃起した肉棒ではたく。

すると、先端から滲み出たねつとりとした液体が垂れて少女の可愛らしいほっぺに付着した。

「ね、花音ちゃん。舐めてくれる？」

「な、舐める……って、何を？」

「わからない？ おちんちん舐めて欲しいなーって言ってるの」

「ふえっ！ おちっ……！ そ、そんなの……う、うう……出来ません……」

戸惑ったように視線が彷徨う。

「あら？ どうして？」

「だって……そんなの……したことない……し……」

羞恥に頬が染めながら、困ったように下を向く。

「大丈夫大丈夫。花音ちゃんは頑張り屋さんだもの、出来る出来る！」

だけど、そんな花音の逡巡を無理やりに押し切るように、絵里衣はすいずいっと腰を突き出し更に肉棒を近づけた。

「ほら、早く。先生が舐め方教えてあげるから」

そして、優しいようでも有無を言わせない口調で少女に迫っていく。

「えう……ううう……」

笑っているけど、その目は笑っていない。怖い。逆らったらもつと怖い目にあつてしまうかもしれない……。

「ほら、最初は舌をちよんつてするだけでいいから。それなら出来るでしょう？ ほら、べーつて」

「んっ……え……」

ぎゅつと目を閉じ恐る恐る突き出される小さな舌。可愛らしいピンクの肉がふるふると震える。

「ちよつと控えめすぎるかしら。もう少し、ほら、べー」

「ん……んん……ぺ……え……」

だけど、それだけでは絵里衣は満足してくれなくて、言われるがままに花音は震える舌を更に突きだした。

「ひゃ……っ！」

っんって舌先に覚えた感触に、思わず悲鳴を上げてしまった。熱くて火傷してしまいそうで、ぬるっと苦い感触に思わず身体ごと逃げよう。

「どうしたの？」

「あ……えつと……」

「ほら、もう一回」

「は……はい……」

ダメだ。逆らえない。怖いとかそんなのじゃない。まるで魔法にでもかけられてしまったみたいなのに、もう一度花音は舌先を触れさせて……。

熱い。

舌が火傷してしまうんじゃないかって言うほどに熱い。

怖い。

びくんびくんってまるで違う生き物みたいに脈動してる。

苦い。

先端から滲み出るぬるっとした液体は苦くてしょっぱくてツンツと鼻にくる酸味があつて、すんつと吸い込むだけで、じいんと頭の奥が痺れてしまうような感じがあつた。

「うん、そうそう。それじゃ、次は舌を動かしてみましようか」

「は……い……んっ……んくっ……」

脈動する肉の塊の上に舌を這わせていく。といつても本当に、ただ舌を乗せているだけなんだけど。

「んふっ、いいわ。素敵。花音ちゃんの舌、ふるふる震えてる」

「う……あ……あう……んっ……」

「上手い上手い。そしたら次は、べろっぺろっって舐めるみたいな感じで動かして」

「は……んっ……ぺちよっ……ぴちよっ……」

「あ……んっ……んふふ……もつと……もつと動かして」

「ちゅっ……ぴちゅっ……ぴちゅっ……んんっ……」

絵里衣に言われるがままに、花音は舌を肉棒に這わせていった。小さな舌をひくりひくりと蠢かせて、ぴちゅっ、ぴちゅっ、ぴちゅっ、仔猫がミルクを舐めるような音が辺りに響く。

「うん、上手。先生とっても気持ち良い」

「あ……んっ……んちゅっ……ちゅっ……ぴちゅっ……」

「あは……もつと気持ち良くなってくれるんだ。花音ちゃんはいいい子だなあ」  
男性器を舐めさせられるという、今まで経験したことのない異常事態に、花音の頭の中はぐちゃぐちゃで混乱の極地だった。

「だけど、それでも『気持ち良い』とか『いい子』とか言われるのは嬉しくて、もつと、もつと舌を動かそうって思った。

「あは……っ……その控えめな舌の動き……くるわね……んっ……」

「ちゅっ……ぴちゅっ……ぺちゅっ……くちゅっ……」

「んふふ、教えなくてもキスしてくれるのね。本当にお利口さん」

わからないなりに舌を蠢かせ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、口をすばめてキスをして、更に溢れてくる液体をちゅちゅと舌先で舐める。

「あ……っ……んっ……あはっ……それ……いっ……先っちゅちゅちゅ

するの、すげえっ……」

「んっ……んっ……ちゅっ……ちゅっ……れろっ……」

「もつと……んっ……もつと……あ……おしつこの穴……くすぐるみたい  
に……」

「んっ……んっ……んっ……れろっ……れろっ……」

頭が痺れる。じんじん痺れる。

なんだか気分がぼうつとしてきて、息が荒くなって、身体の芯が熱く  
なって、そして……そして……。

「はあっ……んっ……いい……いいわ……すごくいい……だから……次は  
コレ……おちんちんっ、お口であおつてしてくれる……？」

「え……」

一瞬戸惑った。

男性器を口の中に入れるということに抵抗感があったし、それよりも  
こんな大きいものを唾えられるんだろうかという戸惑いもあった。

「大丈夫……花音ちゃんは頑張り屋さんだもんね。先生のこと、気持ち良  
くしてくれるもんね？」

「あ……は……は……」

はふうつと一つ息をつく。

頭がぼんやりしているのを、少し沈めようとする。

「あ……んっ……」

そして小さく口を開き……。

「んっ……ちゅっ……」

唇の内側でそつとペニスの先端に触れると……。

「ひんっ！」

びくんっ、と絵里衣の身体が震えた。

「あ……」

それに驚いて一瞬口を離してしまった。

「いいわよ……続けて……花音ちゃん」

「は……いつ……」

「んっ……んっ……」

もう一度くちびるで先端に触れる。

すると、びくんっでもう一度絵里衣の身体が震える。

「あ……むっ……」

「あっ……はあっ……」

「んっ……ちゅっ……」

「花音ちゃんのくちびる、ほんと気持ちいい……あは……っ……」

「あ……むっ……」

そして、少女は精一杯口を拡げ、ガチガチに屹立した肉棒をゆつくり、  
ゆつくり呑み込んでいって……。

「ああっ……すごい……んっ……花音ちゃんのお口の中……熱い……」

「むっ……んっ……んんっ……」

顎が外れてしまうんじゃないかって思った。

「んっ……むっ……あっ……」

呑み込んだはいいけれど、そこからどうすればいいのかわからなくて、  
上目遣いに絵里衣の顔を見上げた。

「ああ……それ……いい……その表情……くるわあ」

ぞくぞくぞくっとして身体を震わせながらくすぐすと笑う。

「そのまま舌を動かしてくれる？ おちんちに押し付けるみたいに」

「んっ……んむっ……んちゅっ……」

「そう……んふっ……そう……そのままれるるって動かして……」

「んむっ……んちゅっ……んむう……」

「んっ……んふっ……あはっ……歯がコリコリ当たるの気持ち良い……」

「れろっ……れろるっ……るれろっ……ちゅっ……くちゅるっ……」

熱い。

熱い。

まるで口の中に灼けた杭を突っ込まれたみたいだ。

でも、でも、その大きく熱い肉棒に舌を絡ませていると、じんつとした痺れが全身に伝わり、苦くて塩っぽいあしが頭の芯まで届いて、息が苦しくて、だけどなんだかどきどきして、頭……頭の中……ぽうつと……霧が……かかったみたい……。

「ほつぺたの裏側も使ってくれる？」

そう言いながら絵里衣は、勃起した肉棒を花音の左頬の内側にぐいと寄せた。

「あ……むあっ……んんっ……」

その勢いで口が開いてしまい、中にたまった唾液がぽとぽとと落ちる。

「ああっ……いいわ……気持ちいい……花音ちゃんの口の中、舌も、ほつぺの裏も熱くて、柔らかくて……」

「んっ……んぶっ……んちゅっ……んじゅ……っ」

おちんちんが口から飛び出ししてしまいそうになって、花音は無意識に手を添えた。

根元をぎゅって掴んで固定して、それかられるると舌を這わせた。

「んかっ……手も動かしてみましようか？ きゅって握ったまま、優しく、丁寧……」

「んっ……んんっ……んんっ……」

内側からぐりぐりとされて、柔らかなほつぺが形を変える。その様子はまるで餌をいっばいに口の中に入れたハムスターのよう。

「かみ……可愛い……花音ちゃん本当に可愛い」

「んっ……！！ んんっ……んむっ……んちゅっ……」

その様子が気に入ったのか、絵里衣はくすぐすと笑いながらぐりぐりんと腰を動かしていく。

「あっ……むあ……っ……んじゅっ……んじゅるっ……」

「もつと……んふっ……もつと舌を動かして？ 先生のおちんちんをれるんれろんつて舐め回して」

「あむっ……んむうっ……んむう……」

「あはっ……いいわっ……すごくいい……ッ……」

「んーっ……んうううっーっ！」

ぐっぽ、ぐっぽと腰を前後に動かす。そのたび花音の口もどからは唾液が溢れ、目には涙が浮かび、それでもなおずんつ、ずんつと突き入れられる肉棒に。少女はただただ必死で舌を這わせ、吸い、口内に受け入れて……。

(なんか……んっ……なんか……頭……頭訳わかんなくなって……)

「あっ……！！ んんっ……！！」

その時ふいに、びくんつと絵里衣の身体が震えた。

「あ……ヤバ……くるっ……」

そのまま手を伸ばして花音のポニーテールを掴み、ぐいっつと喉の奥までペニス突き入れた。

「」

ずんつと喉の奥を突かれ、起動を塞がれ、悲鳴を上げながら身体を震わせる花音。

「もうちよつと……あっ……もうちよつとで……」

それでも絵里衣は更に力を込め、花音の後頭部にも手を回して、ぐっちよぐっちよと肉棒を出し入れして。

「あ……んあつ……い、いき……できな……あつ……わた……しっ……」

びくんびくんと花音の身体が震える。

その震えにあわせる様に絵里衣は更に激しく腰を前後させる。

「でっ……るっ……でる……っ……花音ちゃんのお口の中に……」

「だめっ……だめっ……ほんと……いき……できなくて……わた……」

し……)

「でるっ……っ……」

「だめっ……だめっ……ほんと……いき……できなくて……わた……」

刹那、花音の口内で何かが弾けた。

熱くて早くてねっとりとしたものが、喉の奥に放たれた。

「あつ！ ああつ！ あはつ！ はあああんっ……」

びくんびくんと弾け震える快楽にガクガクと腰を震わせる絵里衣。

「だめっ……だめっ……ほんと……いき……できなくて……わた……」

絶え間なく喉の奥に打ち込まれる奔流に、花音はジタバタと暴れてみせる。

「あつ……はつ……でるっ……まだでる……あつ……はあん……」

「だめっ……だめっ……ほんと……いき……できなくて……わた……」

そんな状態で絵里衣は、更にぐっぽぐっぽと肉棒をピストンさせた。

「はあ……はああ……こんなに出るの……初めてかも……」

「だめっ……だめっ……ほんと……いき……できなくて……わた……」

あつ……しんぢゃ……っ……ああ……っ……)

後頭部を押さえられ、ポニーテールを乱暴に掴まれた花音は、溺れそうな程に注ぎ混まれる白濁から逃れることが出来なかった。

そして……。

「あ……はつ……はあ……っ……すご……まだ出る……んっ……まだ……でるう……」

幾ばくかその勢いは弱くなったものの、まだまだ進り続ける絵里衣の欲望の猛り。

「んあつ……あんんっ……んっ……むっ……あつ……ああっ……」

酸欠に陥り半ば意識が飛んでしまった花音は、それでもなお 喉をこくん、こくんと鳴らして喉に引つかかるねっとりとした精液を嚥下して。ずんっ！

「だめっ……だめっ……ほんと……いき……できなくて……わた……」

その瞬間、絵里衣は最後のトドメとばかりに花音の喉を強く突いた。

「あはつ……喉の奥……きゆうきゆうっ……締まる……」

ゴリっとな音がするほどの勢いで突き入れられた肉棒の先端は、花音の喉の奥の奥に到達し、ぎゅっ、ぎゅっとなめつけられた。

「あ……ああ……のど……おくっ……ごりっ……て……ああ……ああ……わた……し……」

その強すぎる衝撃に、目を見開きびくんびくんと身体を震わせる花音。

生命の危機すら感じるほどのその衝撃は同時に頭の芯まで直接届くような快感になって、ぶしゅっ、ぶしゅっとなめつけられてしまつて。

「だめっ……だめっ……ほんと……いき……できなくて……わた……」





### III

「あ……あふ……ふあ……あ……」  
「んふっ、可愛く縛れた♪」

激しい絶頂にふにゃふにゃになってしまった花首を、絵里衣は手慣れた様子で胡座縛りにし、更に椅子に固定していった。

首から繋がる縄にぐいっと引き寄せられるようになった足首は胸の辺りの位置にあつて、結果として少女の可愛い無毛のワレメがはつきり見える体勢になっていた。

「縄、気持ち良いっ」

「あ……んっ……そんな……あ……こと……んんっ……ない……です……」

「う・そ。顔、真っ赤よ」

「それは……あ……」

はあはあと浅く、そして早く零れる吐息。熱く濡れたそれは、ほんのりと甘い香りを漂わせている。

ぎゅっとならに絞りに出された小さな乳房の先端はツンツと尖り、すつと線を引きいたような可愛いワレメは微かにほころび、トロトロと甘い蜜を溢れさせていた。

「花首ちゃんは本当に縄が好きなのね。縛られるだけで縄に酔っちゃうなんて、すつごく可愛いわ」

「ん……あ……ちが……ます……あ……ふう……わた……えつちじゃ……あ……ない……」

「えつちじゃない子はおまんこをこんなにびちよびちよにしないと思うな」

「あっ！ ああつっ!! あうんっつ！ ひゃ……っ！ ゆび……っ！ ゆびっ……だめえ……っつ！」

くすぐくすと意地悪に笑いながらワレメに指を這わせる。

後から後から少しぬめりのある体液を溢れさせている小さな入口を爪の先でぐりぐりとする。

「んっ……!! んんっ……!! いれちゃっ……やあ……だあ……っつ！」

ほんの少しだけ爪の先端を穴の中に入れ、上向きにクツと鉤状にしてコリコリとすると、花首は椅子と縄をギシギシと軋ませながら、ビクンビクンと小さな身体を激しく震わせてみせた。

「ふふ、かーわいいいっ」

「はあ……はあ……ふああ……」

「ね？ 気持ち良いでしょ？ 縛られたら頭の中がトロトロになっちゃうんですよ」

そつと口を耳もとに寄せて囁く。

ふうって、熱い吐息を吹きかける。

「あ……っ……んんっ……!!」

それだけで花首はぞくんと身体を震わせてしまつて、更に多量の愛液を溢れさせてしまった。

「ちがう……んんっ……もんっ……ちがうもん……っ……わたし……んんっ……縛られただけで気持ち良くなんか……あ……っ……」

花首としては『縛られただけで気持ちよくなったわけじゃない、と言いたかった。』

（わたしは……んんっ……先生だから……）





「いつ……だっ……あうっ……い……だい……で……すうう……っ……」

「そっかあ、うーん、痛がつてる花音ちゃんの顔も魅力的なんだけどもねえ」

「太ももに架けられた縄がギリギリと皮膚に食い込んでいた。それでもなお少女の身体はガクガクと暴れ、ガタツ、ガタツと椅子を揺らしていた。

「先生としては、そういう反応が欲しいわけじゃないのよね」

「そんな花音の様子を眺めつつ、ふむ、と酷く冷淡な様子で頷く絵里衣。

「本当はこういう使い方をするものじゃないんだけど……」

「そして彼女は、カテーテルの先端にゴムボールのようなものを接続して……」

「ひっ！」

狭い尿道の中で、何かが脹らんだ。

「……………」

無理やりに押し上げられるその感覚は、更に強い痛みを花音に与えていった。

「だけど……」

「ゴリゴリ！」

「びあ……っつっ！」

突然、その痛みを飛び越えて、ゾクゾクゾクつと身体を駆け上っていき甘い電流。

「ひ……っ！ ううっ！ うああああううっ！」

今まで感じたことのない暴力的なまでの快感に、痛みを忘れ喉を反り返らせながら震えてしまう。

「あはっ！ ここだあ！ 花音ちゃんのクリトリスの根っこ、ここだね！」

「んにいいっ！ んにああああっ！」

ゾリ、ゾリ、ゾリと神経を直接削られるような感覚。

「ひっ！ うにっ！ うにあうっ！ んにああああっ！」

「触れられてはいけない急所をぐりっ、ぐりっ、ぐりっと抉られる感覚。

「そうそう、この反応が欲しかったのよねえ！」

「目を白黒させながらばくばくと口を動かして、声にならない声を漏らす花音の様子に、絵里衣はぞくぞくと熱く湿った吐息を盛らした。

「ほら、これ。わかるかな？ これ。クリトリスの脚にカテーテルが引っ

かかっているの。ほらあ、ゴリゴリゴリっ！」

「やっ！ あっ！ んにやっ！ んにああっ！ だっ……めええっ！ だめっ！ んぎゅっ……！ らめええっ！」

「ガタンガタンガタンと、そのままひっくり返ってしまいうんじゃなくらいに椅子が暴れた。

「縛っていなかつたら腰がそのまま跳ね上がってしまうんじゃないかってくらの勢いでびくんっ、びくんっで震えた。

「すごい、脚、ガクガクしてる。指先もびいんってなっちゃって！」

「その様子に楽しげな声を漏らしつつ、花音の尿道を犯す。クリトリスの裏側を執拗にこすり、強烈すぎる快感を少女に与えていく。

「ほら、花音ちゃん。お返事。ああ、お口でいわなくてもいいわよ。クリちゃんでお返事してくれたら」

「根元を擦られ刺激された花音のクリトリスは、今までに見たことがないほどに勃起し、ひくんひくんと震えていた。内側から皮を押しつけて現れた真珠色の肉の芽は、絵里衣の望み通りの『お返事』を健気に返していた。

「うふ、気持ちいいねー！ クリトリスの根っこ気持ちいいよねー。こんなに気持ち良かったら、おしっこの穴も好きになれるかしら？ ねえ、花音ちゃん？ どう？ 花音ちゃん？」



「ひつつ!! つつつつ! らららうううつつ! ひつ……!  
は……! ひは……つつ! ひはつつ!!」

過呼吸を起こしたようにひゅうひゅうと鳴る喉。激しい快楽に、ぱくぱくと物欲しげに開いてしまう膣口。

「ふふ……そ・れ・じゃ・あ……」

そして、絵里衣はくすぐすと笑うと、ワントンポ置いて——  
ずんずん。

「びあつつ!!」

カテーテルを花音の尿道の奥深く、膀胱にまで到達させた。

その、瞬間。

「らつつ! うらうつつ!! いうあつつ! んにいああああつつ!」

一際激しく、身体を縛り上げた縄を引きちぎってしまいうんじやないか  
というほどの痙攣。ギシッ、ギシッ、ギシッと壊れてしまいうんじやない  
かと思うほどに軋む椅子。

「」

ちよろ……ちよろろろ……。

膀胱に突き入れられたカテーテルから滴り落ちる花音の小水。  
強烈な快感のあとの開放感に口もとをわななかせながら——

少女は頭の中が真っ白になってしまつて、意識を手放した。

## IV

頭の中がぐちゃぐちゃで訳が解らなかつた。

喉の中に何かを突き入れられたみたいに苦しくて、それが少女の思考能力を奪っていた。

(なに……あ……わたし、今……何してるんだっけ……??)

何度も思考を巡らせようとするのだけど、世界がぐるぐると廻っているように考えがまとまらない。

油断すると身体がふらふらとしてしまつて、そのままひっくり返つてしまふそうになる。

(えっと……確か……わたし、先生のお見舞いに行つて……)

おぼつかない足取り。

危なつかしい歩調。

それでも花音は持ち前のバランス感覚で、もつれそうになる脚をなんとかコントロールしていた。

(外……?? ん……お外……だよな……??)

さんさんと照りつける太陽。初夏にしては少し熱く感じる気温。湿度は低めで風は心地よかつたけど、顔には汗が滲んでしまう。

視線を巡らせると沢山の人が楽しげに歩いていて、その様子を見てようやく、花音は今自分がいる場所を理解した。

(ここ……駅の近くの……??)

そう、ここは彼女の住む街から二駅ほど離れた繁華街。オシャレなカフェやアクセサリーショップ、セレクトショップが並んでいる街並み。

時々クラスの友達と遊びに来たりするところだったが、今日はその姿はなかつた。

(息……苦しい……)

その代わりに――

「おっと。危ないわよ、花音ちゃん」

また脚がもつれてふらついてしまつて、肩を優しく抱き寄せられた。

(そっか……うん、そう。わたし、せんせーと一緒に……)

「え……あ……うん……せんせー……あ……」

お札を言おうとして、だけど、それは言葉にならなかつた。

「んあ……?? お……えお……お……??」

花音が何とか絞り出したのは、弱々しく唸るような声だけだつた。

「ふふ、いいお天気ね。今日はとってもお散歩日和」

(あ……)

そこで気がつく。

(わた、し……)

ぐちゃぐちゃになつていた頭の中が、突然覚醒し思い出してしまふ。

「でも、今日は花音ちゃん大人しいのね。いつもだったらスキップしちゃうそうなくらいはしゃいじゃうのに」

「えあ……つつ! んえあ……つつ! ああつ……んあああつつ!」

「ふふ、縄が気持ち良すぎてそれどころじゃないかしら?」

「んあえええつ! えうえええつつ!」

(そうだつた……わたし……)

声が出ないのは当然だつた。何故なら花音の口は開口具で限界まで押し広げられ、閉じることが出来ないようにされていたから。その上、大きく開いた口腔にはぞつとずするほどに太くて長いペニスギヤグがねじ込

まれ、彼女は呼吸一つまともに出来ない状態に追い込まれていた。

「え……えあああ……んえあああ……」

声を出そうとしても出るのには憐れなうめき声ばかり。だが、そのか細い唸り声すら可憐に聞こえるのは幸福なのか不幸なのか。

「ふふ……こんな可愛い女の子が上着を脱いだら素っ裸に縄だけだなんて、回りの人はびっくりするでしょうね」

少なくとも、絵里衣にとつては幸福なのだろう。彼女は熱く湿った吐息を漏らしながら、パーカー越しに少女のすらっとした肢体を撫で回した。

「んえあ……えあ……っ……えあああ……っ……」

そう、今、花音のだぶだぶのパーカーをその下は、下着すらも身につけていない素っ裸の状態だった。

下着の代わりに………と喋りまわっているのか、すらっとした裸身には菱形に縄が掛けられていて、ほっそりとした腕は後ろ手に縛りあげられていた。

「どうする？ 試してみる？ ね？ しちゃおつか？」

(やだ……やだ……あう……やだあ……)

耳元で囁かれる恐ろしい提案。花音はそれにじわりと涙を浮かべながらふるふるとう首を振る。

「ふふ、冗談♪ 花音ちゃんの裸は先生だけのものだから、他の人に見せたりなんかしないわよ♪」

そんな少女の様子を満足げに見つめると、絵里衣はくくくつと笑って手元にあつたりモコンを弄った。

「熱いでしょ？ 涼しくしてあげる」

それと同時にブウウンと唸るような音。

「夏場にコート羽織ってって訳にはいかなくて困ることも多かつたんだけど便利よね、空調服。花音ちゃんにはSサイズでもだぶだぶだから、おしつこのパックも丁度隠れるし」

「あ……うあ……えあああ……」

「ふふ、ちよつとは馴れた？ カテーテル」

「んえ……あええあ……んんっ……んえええ……」

「今、これ抜いたらどうなっちゃうのかなあ♪」

(や……っ！ やめてっ！ そんなの……だめ……だめえ……)

「ああ、ダメよ。そんな顔してちゃ。回りの人が『おかしいな？』って思っちゃうわよ。花音ちゃん、ただでさえ可愛すぎて回りに注目されるんだから。困るでしょ？ そんなの」

「えう……っ……えうう……っ……うえああ……」

意地悪に笑う絵里衣の言葉にこくんこくと強く、何度も頷く花音。

「それじゃあもうちよつと頑張つて。先生がいいもの買ってあげるから」

だが、頑張れと言われてもどうすればいいのかわからない。花音は道行く全ての人が自分に視線を向けてくるような錯覚に襲われながら、よたよた、ふらふらとおぼつかない足取りで、絵里衣に導かれるがままに歩いて行くのだった。

## S

「ええつと、この辺りのはずなんだけど……」

花音にとつては無限にも感じる時間が過ぎて、絵里衣はふと足を止め



た。

そこは更に一駅ほど離れた郊外の大きな緑地公園。繁華街からはおおよそ歩いて15分くらい、近隣に住んでいる人の憩いの場所だ。

元氣いっぱいの花音からしてみたら、なんともない距離。だけど、今の彼女は脚が震えてしまうほどに疲れ切っていて、今にもカクンと膝が折れてしまいそうだった。

「ああ、あつたあつた、あれあれ」

そんな花音の様子には気にも留めず、絵里衣は公園の一角を指差す。

(クレープ……屋さん……?)

半ば朦朧もろくとしている意識で花音が視線を向けると、そこには派手なPOPで飾られているキッチンカーがあつた。

「あれえ? エイジャの姉さんじゃないですかあ!？」

その時、ふいに掛けられる明るい声。

「元氣そうね、ヒカル」

そしてひよつこりと顔を出したのは、髪の毛を七色に染め、耳、鼻、くちびるに沢山のピアスをつけた、なんとかもチャライ感じの若者だ。

「なんすかなんすかどうしたんすか? シブンになんか用事スツか?」

「うん、そうね。用事。あなたにしか頼めないこと」

「うわあ、なにかなあ、姉さんにそう言われる怖いっスねえ」

ヒカルと呼ばれた若者は絵里衣と随分親しいのか、それとも誰に対してもそうなのか、ケラケラと軽薄な笑みを浮かべてみせる。

「ん……? あれ……? その子……」

そしてふと、花音の存在に気づき――

(ひっ……!)

「あー、なるほど!」

そして花音をじろじろと無遠慮に見つめたあと、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべた。

「新しい仔猫ちゃんスツか? 相変わらずいい趣味してますね」

「可愛いでしょ?」

「うん、可愛いっス。そんな可愛い子緊縛して野外露出のお勉強スツか。

ふーん、尿道にカテーテルも入れて……」

(なんで……? どうしてわかっちゃうの?? もしかして、他の人にもわかっちゃつてる……!?)

何故わかるのだろう。花音は今自分が置かれている状況を的確に言い当てられ、拘束された身体を動かして、なんかと絵里衣の後ろに隠れようとする。

「羞恥心が強めなのがいいですね。ヤバイ、シブンにもちよつとまみ食いさせてくださいよ」

(やだっ……やだあ……つ……)

その瞬間だった。

ふいにぞくつと背筋が震える感覚。

「は? 殺すわよ」

そして絵里衣の口から漏れる氷点下の言葉。

自分に向けられた言葉ではないとわかりつつも花音は震え上がってしまった。

「す、すみません! マジすみません!! 調子乗りすぎでした!!」

そして、声を向けられた本人であるヒカルも先ほどまでの軽薄な様子とうつて変わって、そのまま土下座でもしそうな勢い出、ぺこぺこ頭を何度も何度も下げた。

「か……冗談よ」

薄笑いを浮かべてそう言うけれど、とても冗談には思えない。今まで見たこともない絵里衣の様子に、花音の恐怖心は更に高まってしまう。

「ク、クレープ焼きましようか!? そっちの仔猫ちゃんにも! ジブンの驕りっスから!」

「いいえ、今日はクレープはいいわ。それよりも……『例のやつ』見せてくれる?」

「あ、はいっ! アレっスか! ちょっと待って下さい!!」

そしてヒカルももう、完全に怯えてしまっている様子でしゃがんで足元をガサガサと漁ると、何かを手に持ってカウンターから身を乗り出してきた。

「今日持って来てるのはこれっス!」

そうして絵里衣に差し出されたのは、なにやら紋様が描かれた紙。

「最近人気はこの快感3倍と、絶対イケないって淫紋っス」

「へえ、繁盛してるんだ」

「おっ! お陰様でっ!」

「これはなに?」

「ああ、これは淫紋と子宮の感覚をリンクさせるやつっス」

「こっちは?」

「これは子宮快感を3倍にするやつっスね」

「こっちはGスポット快感増のやつだっけ?」

「そうっスそうっス! これも結構人気のヤツですね」

「あと、確か気配誤認のもあったわよね」

花音のことを置き去りに、よく分からないことをあれこれ話している二人。

「ねえ? 花音ちゃん、どれがいい?」

「んむっ……んも……っん……?」

突然話を振られても、答えることが出来なかった。

「ふふ。選べないかあ」

そもそも声も出せない、手も自由に動かせない状態では、選べと言われても無理な相談だった。

「それじゃあ先生が選んであげるね♪ ええつと……子宮リンクをメインにして、これとこれ、トッピングすること出来る?」

「はあ、出来ますけど……いいんスか?」

「そういいつつ、チラリと花音に視線を向けてくるヒカル。」

「仔猫ちゃん初心者でしょ? 大丈夫っスかね」

「いいのよ、それで」

「はあ……それじゃあちよつと待って下さいね」

その視線はなんだか、ひどく憐れみに満ちたものだった。

## S

公園には犬の散歩をしているおじさんや、ランニングをしているお兄さんやお姉さん、ベビーカーを傍らに談笑している若いママさんなど、たくさんの方がいた。

「ふふ、花音ちゃん♪ いいもの貼ってあげるわね」

そんな中、ちょうど辺りからは死角になった木陰に花音を連れ込み、くすくすと笑う絵里衣。

「んう……っつ! んむうううんんっつ……!」

懇願するような視線を自分に向け、何度も何度も頭を振る花音の必死の願いを聞きながして、少女が羽織っただぶだぶの空調服の前を開けていく。

「わぁ、びっしり汗かいてちゃってるわね」

「ううううんっ……!!」

こんな状態で緊縛された身体を外に晒されて、誰かに見られたらと思うと気が気じゃなかった

「ふふ、おしっこのパックも満タンになっちゃった」

「んんっ……!! んうおうっっ!!……っ!!」

尿道の奥深く、膀胱にまで到達しているカテーテルをゆっくり抜き差しされて、じいんと痺れるような痛みを感じた。

「んー? でも、お股の辺りが濡れてるのは汗だけじゃないかなあ?」

「うううんっっ! うううんっっ!!」

「乳首もつんつんになっちゃってるし、花音ちゃんは本当に縛られるのが好きだねえ」

(違う……違います……わたし、そんな……っ!!)

更に意地悪な言葉を投げかけられ、ぼろぼろと涙を零してしまふ。

「うふっ、可愛いなあ。花音ちゃん本当に可愛い。泣き顔も最高ね」

だが、絵里衣はそんな花音の表情にもうっとりとした溜息をついて、うるうると瞳を熱く潤ませる。

「でも、やっぱり気持ち良く喘いでる顔が一番好きなのよね」

「んううんっっ!」

ふいに下腹部……おへその下の辺りをぐっつと押された。

「んうんっ!」

「ふふ、ここだ。この辺り。花音ちゃんの子宮」

「~~~~~」

ぐりぐりと指が食い込むように動かされると、ぞくぞくと背筋が震えてしまう。

(な……に……? これ、なに……!?)

「ここに……さつき買った淫紋シールを貼り付けて……」

「んっ!」

不思議なデザインのとつウシールのようなものを下腹部に貼られると、ぴりっ、と電気が流れるような感覚があった。

「ええっ……確か肌に馴染むまで優しくマッサージだったわよね」

「んっ……んんっ……んう……っ……んんっ!!」

(な……に……なんなの……? えっ!? あっっ!?)

「あはっ、びくんっした。もうちよつとかしらね」

「んむあああっっ! んもおおんううっっ! んいあああっっ!」

(か……身体……! な、なにっ!? ふあっ! なにっ……!! これ……っっ!?)

お腹にぐりぐりとシールを押し付けられると、お腹の奥がぎゅんっ、きゅんっと痙攣する。

(あ……っっ! だめ……っっ! んあ……っっ! これ……っっ! ? へん……っっ!!)

それでもなお、お腹を撫で回されると、がくがくと身体が震え、膝がかくんと折れそうになっちゃった。

「へえ……すぐ早く効いてくるのね」

そんな花音の様子をくすくすくすくと笑う。

「さ、それじゃあうちの方行きましようか」

「んっ! ? ううううんんっ!!」

そして花音の肩を抱いて公園の真ん中辺りにあるベンチに向かおうとすると、少女は何をされようとしているのか気づいたのだろう、もう一度ぶんぶんつと激しく頭をふって抵抗する。

「やつ！ やです……っ！ 人に……っ！ 人に見られちゃう……っ!!」

絵里衣の家からここまで歩いてくるだけでも恥ずかしくて死んでしまいたいそうだった。気づかないって言われても誰かの視線が向けられているような気がして、誰がひそひそと自分のことを囁き合っている気がして、このまま消えてしまいたいくらいだった。

それなのに――

「んーっ！ んむううっ！ んんあああっつ！」

首だけでなく全身をジタバタと暴れさせて抵抗する。無駄なことかもしれないけど、せすにはいられない。

「ふふ……大丈夫♪」

だけど、絵里衣はそんな花音にくすくすと笑う。笑いながら、スマホのインカメラに花音を映してみせた。

「ほら、見て。花音ちゃん、映ってない」

「んっ……？ んお……っ??」

絵里衣の言うとおり、確かに映像の中のに花音の姿はなく、ただ公園の景色が映るばかりだ。

「アイツね、あんなにチャライけど、淫紋作りだけはすごいよ。これはね、回りの人の目だけじゃなくて機械も騙せるくらい高性能な幻影なの」

（見えてないんだ……）

その言葉に、一瞬ほっとしてしまう。全然安心出来る状況ではないのに、全身の力をふつと抜いてしまう。

「ああ、でも、感じすぎて大声上げたり暴れたりしたら幻術が溶けちゃう

からね」

その一瞬の隙を見逃さず、絵里衣は花音をベンチに引きずるようにして連れていった。

「ここねえ、公園が見渡せるすごくいい場所なのよ」

少女の肩を抱きながら、ゆつくりと耳元にくちびるを近づけていった。

「花音ちゃんの可愛い所、みんなに見て貰おうね」

「んんっ!?」

れるんつと耳に舌を這わせる。ふうっ、熱い息を吹きかける。

「んーっ！ んうんんんんっ！」

暴れてみてもそれは全て無駄な抵抗だった。そんなことは花音にはわかっていることだった。

「ほら、大声だしたら気づかれちゃうかもしれないわよ？」

「ん……っつ！」

びくんつ、と少女の身体が震える。

「先生はそれでもかまわないけど……」

「ん……あ……っ……」

ぼろぼろと涙が零れる。

「う・そ♪ 花音ちゃんのえつちな姿は先生だけのものよ♪」

大人しくなった花音の身体を、絵里衣は抱え上げる。

「んうっつ！」

そして少女の頭が下になるようにして、ベンチに拘束して。

「んあ……っつ！ んうっつ!!」

不自然な姿勢をとったせいで、喉の奥にねじ込まれたペニスギャグが更に奥にまで沈みこんだ。

「*W W W !! ぷらぷら……!! !! !!*」









人に晒していた。少女のお腹に貼り付けられた淫紋ステッカーの効能で回りの人は誰も少女に気づいてはいないが、それで『安心』となるわけもなく、花音は死んでしまいたい程の羞恥に震えていた。

「んー？ 元気ないなあ。おっぱいの刺激、足りない？」

「んっ！？ んーっ！？ んーっ！？」

縄によって絞り出され、つんつと尖った乳房にはニップルドームがつけられていて、可憐な乳首と乳輪をぎゅつと吸い上げられている。同じような器具はクリトリスにも取り付けられて、ぶーんぶーんとモー夕で震えながら少女の身体を苛んでいた。

「息は出来るでしょ？ ペニスギャグ抜いてあげたし」

「んえ……えええつ……んえあうつ……！」

凶悪な責め具から解放されたとはいっても、少女の口は開口具で大きく、顎が外れそうにまで押し上げられている。冗談みたいに大きく太いペニスを横した責め具——まさかこれが花音の喉を貫き胃の辺りまで到達していたなんて誰も信じないだろう——は開口具にぶら下がってぶらんぶらんと揺れていた。そして更に、舌はクリップでぐいつと強く引っ張り出された状態で、彼女の健康的な口の中と、真っ赤な喉奥を晒していた。

「おまんこに入れたローターの振動が物足りない？」

「んーっ！ んーっ！ んーっ！？」

「お腹の電マかな」

「んーっ！？」

きつと、わざと言っているのだろう。花音の思いとは真逆のことを口にして、楽しげにくすぐすと笑う絵里衣。

「おしっこパツクふたつ目になっちゃったね。みんなに見て貰いたいね」

「んんっ！ んんんんっ！」

「おまんこから出てる愛液もヤバイね。びっちゃびっちゃのとつろつろで泡立ってる。そんなにみんなに裸見てもらいたいんだー」

「んーっ！？」

「やあ……やあ……わたし……わたし、そんなこと思っていない……思っていないのに……」

怖くって悲しくって涙が零れる。

「あらら？ どうして泣いちゃってるの？ 先生花音ちゃんは笑ってる方が好きだなあ」

そんな意地悪な言葉に首を振ろうとすると、舌に吊された巨大 dildo が揺れて、ずきんとした痛みと、形容できない甘い感覚が頭の中を灼く。

「ほらほら、花音ちゃん行くよー」

「んっ……！ んうううっ！」

そんな少女から伸びるリードをぐいぐいと引っばって、絵里衣はとても楽しそうにくすぐすと笑って……。

（やだ……ああ……もうやだ……こんなの……こんなの……っ）

誰にも見えていないと言われても視線を感じてしまう。もしかしたらひとりくらいには見えているのかも知れないと思ってしまう。花音はそんな風に身を焦がす強烈な羞恥心に震えながら——

ただ、導かれるがままに脚を動かすことしか出来なかった。



花音が連れてこられたのは、公園からすぐ近くにある一軒のラブホテルだった。そこまでの道のりはほんの数分だったけれど、花音にとつては永遠に感じられるほどの時間だった。

「ふふ、馴染みのホテルはいいわね。すぐに必要な準備をしてくれるから。最近は何と使つてなかつたんだけど」

チェックインの手続きを済ませて、にこにこ上機嫌な絵里衣。一方、花音と言えは――

「あ……あう……せんせえ……せんせえ……もう、ゆるひて……」

口枷は外されたものの、舌と口が上手く動かないのか、おぼつかない口調。

「わたし……んっ……わたし……もお……む……り……れす……」

ぎゅつと緊縛された細い身体を震えさせて、彼女はただただ憐れに許しを乞うばかりだった。

「ふふ、ダメー♪」

だが、そんな花音の言葉は絵里衣には届かない。彼女は『許す』気がない。

「ほら、花音ちゃん。ゆっくりでいいから階段、上がつてこようね」

「あう……あうう……」

ホテルのホール、広々としたその丁度真ん中には、上の階に向かう階段があった。更に奥に行けばエレベーターもあるのだが、絵里衣はそれをうつもりはなかった。

その階段には、花音の胸の高さぐらいの位置にびんっとロープが張つ

てある。そしてそれは上の階――二階は吹き抜けなので三階――まで届いている。

そのロープは花音の膣とアナルにねじ込まれたデイルドウについている穴を潜り、更に彼女を後ろ手に縛り上げた縄についているカラビナを経由して、階段の下にあるボールに括り付けられていた。

「ほら、いち、に♪ いち、に♪」

「う……ううう……」

手拍子を打ちながら上機嫌な絵里衣。花音はその声によた、よたとふらつきながら歩を進める。

「あ……っ！ んっ……っ！」

そんな女のクリトリスを、ロープにつけられたコブが通過した。

「んんっ……っ！ ひうん……っっ！」

一歩進む度にごりっ、ごりっとう急所を挟まれて、少女は悲痛な声を上げることもできなかった。

「ほらー、花音ちゃん、止まっちゃダメよー」

その度を過ぎた刺激に耐えかねて足を止めると、絵里衣は階段の上から少女の首に繋がったリードを引く。

「は……っ……んんっ……ふうんっ……」

「はい、もう一回、さん、に♪ よん、に♪」

それに急かされるように、花音はまだ一歩、二歩と進んでいく。

「あ……ああ……あああ……」

彼女が通過したあとのロープには、べつとりと愛蜜が付着していた。雫を垂らして滴り落ちるそれは、少女の身を焦がす官能をありありと証明していた。

「あは♪ えつちなオツユでびしょびしょだね。先生、花音ちゃんがそん



なに感じてくれて嬉しいなあ♪」

「そんな……ああ……そんなこと……わた……し……」

「ん？ なにか言った？ 花音ちゃん？」

「ひ……っ……」

否定しようと声をあげると、じろりと睨まれた。その視線が恐ろしくて、花音はぶるつと身体を震わせる。

「んー、もつともつと気持ち良くして欲しいかな？」

「ち、ちが……っ！ わた……ひんっつ！」

少女が跨がっている縄をぐいっつと掴み上げるようにして引っぱった。すると、縄がびんつと強く張って、少女のクリトリスをぐりつと擦った。

「ほおら、早く」

さつきは慌てなくていいなどと言ったくせに、子供っぽく口を尖らせて急かす。

「先生待ちきれないなあ。早くお部屋に行きたいなあ」

「あ……う……うう……や……んっ……ま……っ……て……」

「まーてーなーいー」

「あんっつ！ んんっ！ ふあんっつ！」

ロープを強く揺らすとコブがクリトリスを何度も何度もぐりぐりと抉って花音は苦痛と快楽に身悶えた。

「はーやーくー」

「うう……ううう……」

ダメだ。許して貰えない。そんな気は欠片もない。

絵里衣の目の奥に尋常ではない欲望の炎を感じながら、花音はなんとか足取りを速くしようと思えて――

「んっ！ あっつ！」

「ごりんっ！ ごりんっ！！ とクリトリスが潰された。

「いつ……あっ……ああっ……あう……っつ……」

「ぼたん、ぼたん、ぼたん、愛液が滴るのがわかった。

（早く……あ……早く登らなきゃ……）

よたつ、よたつと足を進める。階段を一段一段踏みしめるたび、ガクガク、ガクガクと足が笑う。

「ふふ、いいよ♪ いいよ♪ その調子♪」

「はあ……はあ……はあ……」

（アソコ……クリトリス擦れて……痛い……ジンジンする……もう、やだ……）

目の粗いロープ、それで作ったコブに擦られて、少女の一番敏感な部分はヤスリを掛けられたような状態だ。

痛みとも快感とも判別のつかないジンジンとした疼きに苛まれながら、

花音は一步、一步、導かれるままに階段を登っていった。

これが終わりではなく、むしろ始まりなのだという絶望感に苛まれながら。

S

「おつかれさま、花音ちゃん♪」

長い時間を掛けてようやく階段を登り切り、部屋に辿り着いた頃には花音はぐったりとしていた。

「頑張ったわね♪」

「あ……や……少し……やす……ませて……ください……ああ……」

「うんうん♪ 大丈夫、休ませてあげる♪」

だが、言葉とは裏腹に絵里衣は少女のぐったりとした身体の縄を一度解き、新たに緊縛していく。

「あ……やあ……い、た……ああ……っ……」

そして天井からぐつと吊すと、片脚を高々とあげた状態で固定した。

「い……っ！ いう……っ……っ……」

その親指に紐を括り付け、先端についたクリップで大陰唇を大きく拡げた状態にしてしまう。

「ああ……綺麗……花音ちゃんのおまんこ、ほんと綺麗ね。ピンク色でぬらぬらして……ふふ、クリトリス腫れちゃってる」

「あうっ！ いう……たあ……っ……っ……」

散々擦られて赤くなったクリトリスを包皮越しに潰されると、びくんっ  
と腰が跳ねた。その勢いでぐぐつと更に大陰唇が開き、責め苛まれて少  
し口を開けている尿道口と、ひくひくと震えている膣口が露わになった。

「あ……んんっ……せんせ……あっ……いた……んっ……アソコ……  
あっ……痛い……です……」

「そっか、足つかなくて怖いよね」

「ん……あ……そうじゃ……なくて……ああ……」

足が床につかなくてぶらぶらしてしまっているが、先ほどまでの刺激  
に比べれば辛いというほどではない。だが、絵里衣はその花音の声にと  
んちんかんな返事をして、その足下にバスケットボールを置いた。

「ほら、これで足、つくわよね」

「あ……っ……んんっ……あう……っ……あう……っ……」

それは足の親指をぐつと伸ばしてようやく届く程の絶妙な高さ。下手

に届くものだから、花音は必死で足を伸ばす。

「んあ……っ……あ……っ……ああ……っ……あう……っ……」

それはいつそ届かない方がいいくらいのもだった。届かないなら無  
駄な力を使うこともなく、吊り上げられるがままにしていたらう。

「ふふ……足、ぶるぶるしてる。ほらほら、頑張ってる？ バランス取るの  
は得意でしょ？」

花音は身長こそ低いですが、クラスでもトップクラスの運動神経を誇って  
いる。バランス感覚もよく、いつもならばこんなことで苦労することな  
どない。

だけど、責め苛まれぐちゃぐちゃになった頭はいつものようには働い  
てくれない。こんな風に縛られて不安定な状態にされれば、身体を上  
手く操ることも出来ない。

結果、花音はまるで大道芸の玉乗りのように、バスケットボールにちよ  
んっ、ちよんっとして親指の先を当て、ぴんっとならばした足をぶるぶるとさ  
せながら、ぐらぐら、ふらふらと身体を揺らすことしか出来なかった。

「ふふ……おしっこの穴、ばくばくっしてしてる。カテーテルを抜いちゃっ  
たのが寂しいのかしらっ？」

そんな花音をうつつと見つめながら、ぐつと少女の股間に顔を寄せ  
る。

「んー、それじゃあまた、何か入れてあげるね」

くすくすと笑いながら、何かを手元に引き寄せせる。

「じゃじゃーん」

「な……なに……それ……？」

絵里衣が喜びに取り出したものが何なのか、最初花音にはわからな  
かった。それは、幾つもの小さな玉が連なった細長いものだった。

「くすっ……わからない？」

ぞくぞくと背筋が寒くなる。

「そっか、わかんないかあ♪」

わからないけどきつと怖いものだと思ひ至り、いや、いやつと意識せず首を振ってしまう。

「あ……っ……いつ……ああ……っ……！！」

それだけで身体のバランスが崩れて、足がガクガクと震えた。バスケットボールの上で小さくジャンプしているみたいに、つんつ、つんつと親指ついて離れてまたついたたりした。

「これはね、ふふ、尿道に入れちゃうの。ずるずるって入れて、膀胱まで詰め込んだっちゃうの」

「ひ……っ……！！」

わからない方が幸せだっただろうか。いや、どうせ詰め込まれるのだから、幸も不幸もない。

「や……やだ……も……やだあ……おしっこの穴、いやあ……」

長い間カテーテルを挿入されていた尿道はひりひりとして、ジンジンと疼いていた。そんなところにまたあんなものを入れられたら、きつと泣いてしまうほど痛いに違いなかった。

「ふふ、大丈夫。痛くないようにしてあげるから」

くすくすと笑いながら、れるるんと小さな玉を舐め回す。べつとりと、滴るほどに唾液を擦りつけていく。

そして――

「やだっ……！！ あっ……！！ やだあっっ！！」

くばつと尿道口を押し拡げられて、花音はじたばたと暴れた。そのせいでぎりつ、ぎりつと縄は身体に食い込んだし足はびりつ、びりつと痺

れたけど、彼女にとつてはそれどころじゃなかった。

「ふふ、そんなに喜ばないでよ♪ 先生、嬉しくなっちゃうじゃない」

「やあ……っ……」

ぽろぽろと涙が零れる。ふんふんと首を振る。

「さあ、それじゃあお待ちかね……」

「あ……だめっ……だめ……」

ぬぶっ

「ひっ！！」

にゅるんと沈みこむように、一つ目の玉が尿道に入り込んだ。

「あっ！！ あっっ！！ いあっっ！！」

するとそこから連続で、にゅるん、にゅるん、にゅるんと玉が入り込む。いつ……た……っ……！！

苦しげな吐息。悲痛な声。だけど、そんなことで絵里衣は手を止めることはなく――

「あっ！！」

ずぶっ。

「ん、あ、あ、あっっ！！」

ずぬるっ ぬるっ ぬるんっ

後から後から、尿道を押し拡げ入って来る小さな玉。

「い……っ……！！ あっっ！！ あああっっ！！ んあああああっっ！！」

それは尿道を通って膀胱にまで入り込み、その中でぐるぐるどぐる

を巻いていった。

「はあっ……はあっ……やあ……やだ……やだあ……抜いて……ぬいてえ……っ……」

じんじんと痛む。熱く疼く。

「もう、やだあ……」

酷く子供っぽくぐすつ、ぐすつと嗚咽を漏らす。

「んー、まだ半分くらいしか入ってないわよ」

そんな花音の様子をうっとり見つめつつ、更に絵里衣は細長い棒を何本か取り出した。

そして。

「いぎっつー！」

ぐりんと予告なく、その内の一本を花音の尿道にねじ込む。

「いぎあつっー！ ぎらいらんっつー！」

二本、三本と追加していく。

「いっ……だっ……ああっ……いだい……っ……いだい……」

じんつ、じんつと熱かった。それが痛みを通り越した感覚なのだと、花音にはわからなかった。

「あは♪ まだまだ入りそう」

「いあああつっー！ えあつー！ いぎあああつっー！ やあだあ……っつー！」

四本、五本、六本。無理やりにねじ込まれていく細い棒。それは見た目は『細い』ものだが、花音の尿道に比べたら太すぎるもの。それが何本も何本もねじ込まれ、花音はただ苦悶の声を上げるばかりだった。

「ふふ……奥まで入った。どう？ 花音ちゃん、どう？」

「いっ……うう……っ……あう……いだい……いだいのやだ……いだ

いのやだあ……っ……」

「気持ち良くない？」

「そんなの……っ……そんなのっ……むりりっ……っ！」

「ふむ……」

泣きじゃくる花音を見つめつつ考える。

「くすっ♪」

それから指を下腹部に刻まれた淫紋に伸ばす。

「ひっー！」

とんつと、触れるだけで身体が跳ねた。

「ひいらんっつー！」

ぐりぐりつと指を押し付けると、高い声が漏れた。

「ふふ、痛いね。すごく痛いね。でも、ここをこうされるとぞくぞくっつて

気持ちよくなっちゃうね？」

「んいっつー！ いあつっー！ いううらんっつー！」

淫紋を愛撫しつつ、尿道に刺さった棒をぐりぐりと動かす。

「いぎっ……っ……！ いぎああんっつー！ いうううっつー！」

すると、苦痛と快楽が同時に身体を走り抜けて、甘い呻きが漏れてしまふ。

「あ……ああ……ああ……」

「カテーテルも入れてみましょうか？」

「やつ……やあ……っ……」

「でも、気持ち良いかもしれないわよ？」

「ない……っ……そんなの……っ……」

ふるふる頭を振る花音をくすくすと笑う。そうして、さっきまで入っていたものより太いカテーテルを取り出す。

「おしっこ、漏らしちゃダメよ」

「んあっ！」

耳元で囁くと、ぐりっと押し込んだ。

「いつ！ ぎいいつつ！」

それはキツくて痛かったけれど、同時にお腹の奥が……子宮が、ずくんとしてしまふ感覚があった。

「いっぱい入ってるから入りにくいわね」

「んにいつつ！ ンにあああッつ！」

ずぶつ、ずぶつと侵入してくる異物に、身体が悲鳴を上げる。

「ひっ……！ うっ！ ひううんっつ！ あっ……！ ひああんっつ！」

だけど同時に身体の芯に、甘い痺れのようなものが拡がっていく。

「ほおら……届いた♪」

「あ……っ！ ああっ！ ああああ……っつ！」

瞬間、花音は頭の中でなにかがぱんっ！ て弾けて。

いよばばばば……

カテーテルを伝って零れ落ちる小水。

「あら、我慢しなさいって言ったのに」

「だ……て……っ……ぐすつ……だっ……てえ……っ……」

ぐすつ、ぐすつと泣きじゃくりつつ、無駄な努力を試みるが、膀胱までカテーテルを通しては、今さらそれを止める事なんてできるはずがない。

「これは……オシオキね」

そんな彼女を見つめてニンマリと、理不尽に魔女のような笑みを浮かべる絵里衣。

「やあ……なに……するのぉ……っ……」

「さあ、なにされるのかしらね？」

くくくつとほくそ笑みつつ、今度は大きなシリンダー式の流腸器をとりだす。そして、中に薬液を満たし、花音の尿道から顔を出しているカテーテルの先端に繋いで――

「ひっ！」

ぐいっと押し込まれると、空っぽになった膀胱に液体が逆流してくるのを感じた。

「ひいひいんっつ！」

ぞわぞわぞわつと総毛立つ様な感覚と共に、今まで感じたことのない違和感……？ 快感を覚えた。

「ふふ……入れてえ……出して」

「ひあっつ！ ひああああんっつ！」

今度は膀胱に満ち満ちた液体が一気に吸い出されていく。全身の熱が奪われてしまうような感覚にぞくぞくと震える。

「また入れて……」

「ひあああっ！ ひあああんっつ！」

「出して……」

「んにいらいらいっつ！」

頭がおかしくなりそうだった。苦痛と、そして、何がなんだかわからない感覚に、心が壊れてしまいそうだと思っただ。ぷん、と何かが切れたような感覚があつて、錆びた鉄のような匂いと共に、鼻からつらつと鼻血が垂れていくのを感じた。

「やあ……やあああ……もう、入れないで……入れないで……」

「ええ、入れてあげるわね」



「いうっ！　いうああっ！　だっ……めっ……いれっつ！　ない  
でえええっつ！」

膀胱が脹らむ。限界まで押し広げられる。子宮がぐつと強く押さえつけられて、下腹部の淫紋とリンクしてばちばちと電気が弾けるような感覚に襲われる。

「はーい、出すよお」

「ひっ！　あっつ！　ひああううっつ！　だめっ……！　だめっ……！  
抜いちゃダメ……っつっ！」

ぐぐつ、ぐぐつと強く吸い上げられる。一気に膀胱が小さくなって、中に詰め込まれた小さな玉と棒の形がしつかりとわかってしまうような気すらしてしまう。

「ふふ……うふふ……素敵……素敵よ花音ちゃん。とつても可愛い……♪」  
膀胱を責められて悶絶する少女の媚態に、絵里衣のペニスがギンギンに硬くなる。あり得ないほどの大きさになり、びくんびくんと脈動する。

「んふっ……んふふっ……先生、また射精しちゃうそう」

片手で肉棒をすりすりとしつつ、もう片方の手でアソコをくちゅくちゅと弄る。

そして、何度となく膀胱を虐めた後、流腸器をカテーテルから取り外して――

「あ……っつ！　ああううっ！　ふああああっ……！」

じよばばばと溢れる大量に詰め込まれた薬液。その開放感、苦痛と快楽とイケナイことをされているという罪悪感、その全てが一体となつて、花音の心をむちゃくちゃにかき乱して――

「うふ……うふふ……花音ちゃんのおしっこ、あつたかい♪」

少女の小水を肉棒に受けながら、絵里衣はびゅくびゅくつ、どくんどく

くんと激しく射精し精液を少女の身体にぶちまけた。

「ふふ……はい、かんせいいい」

ぐつたりと崩れ落ちてしまった花音を絵里衣は改めて縛り上げると、部屋にあるキングサイズのベッドに寝かせた。その上で足を大きく開かせ。閉じることが出来ないように棒を渡してしまう。後ろ手に廻していた両手も肘から下だけを自由に、その棒を握らせるように固定した。

「なに……するんですか……」

「すつごく気持ちのいいこと♪ 花音ちゃんが今まで味わったことのないね」

ぞくつ……。

その、無邪気とも言える笑顔に恐怖を感じる。この上いつたいどんなことをされてしまうというのだろう。

「はい、これ、ちよつと啜えてね」

「え……んあつ……んもあ……つ！」

半ば強引にギヤグボールを啜えさせられた。

「そ、れ、か、らあ」

「んんっ！ んー……んんっ！」

大陰唇の上側と小陰唇の下側、左右それぞれの計四隅がクリップに挟まれ、腰に回したベルトを使って女の子の部分が大きくガバツと、普通にしていれば決して見えるはずのない部分まで露わになるように拵げられる。

「はあ……ほんと、花音ちゃんのおまんこって綺麗……健康的なピンクで

瑞々しくて、形も良くして……」

その様子をまじまじと見つめ、ほうつと熱い溜息を漏らす絵里衣。

「ふふ……花音ちゃんのお腹、ぼこんつて脹らんじゃってるわね」

それからふいに下腹部……淫紋が刻まれている辺りに視線を移す。少女の普段はぺったんこでよく締まったお腹は、不自然なほどに脹らみ、たぼん、たぼんつと揺れていた。

「膀胱満タンだと苦しいかな？ でも、気持ち良くもあるでしょ？」

「んっ！ んー……んんっ！ んうううっ！」

脹らんだお腹を優しく撫でる。

するとそれは面白いように形を変え、少女の身体をぞくり、ぞくりと震わせる。

「我慢出来なかったら出しちゃっていいよ。まあ、出来ないだろうけど」

少女の尿道は長方形の小さなウレタンのパーツに塞がれていて、その中の液体は空気を送り込んで脹らませるバルーンで完全に堰きとめられていた。

「さ……て、と」

ひとしきり少女のお腹の感触を楽しんで手を離す。

「花音ちゃんのおまんこの中、見せて貰おうかな」

そういつて取り出したのは、本来は四つあるはずのものがひとつ欠けたカップホルダーのような、L字に曲がった金属製フレームで形作られた器具だった。

「んっ……んん、んう……っ」

何使うか想像もつかない道具を見て、怯え、震える花音。

「これはね、こう使うの♪」

そんな様子もご褒美だ、とばかりににこにことした絵里衣は、そのパー

ツを大きく上げられた少女の小陰唇の内側——膣口にぐりつと挿入した。

「んあっっ！」

目で見るよりも強い圧迫感に、花音は呻いた。

膣穴を横に大きく上げられて、今までほとんど空気が触れたことがない部分が露わにされてすーすーする。その感覚に身体がびくん、びくんつと震え、ぞくぞくつと背筋を悪寒が駆け上っていった。

だけど、絵里衣はそんなこと気にした様子もなく、更に少女の胸縄に結んだ紐を上側のフレームから腕の縄へ。そこから脚の付け根をくぐらせて左右のフレームの上下へと往復させ、最後に両端を足の親指に括り付けていく。すると、紐に引かれたフレームは骨盤がみしみしと悲鳴を上げるのもお構いなしに膣口を上げ初め、花音がその刺激で反射的に脚を伸ばそうとしようものなら更なる拡張が襲いかかってくる。

「ぎゃあゝ かわいいゝ 花音ちゃん膣の中、ほんとうにまっピンクなのね！」

その結果、花音は陰唇を四方向に押し上げられ、更に膣口を器具で三方向にがばあつと掻き分けられ、秘めたるものを露わにされてしまった。ひくひくと蠢くひだひだと、ひだひだからじんわりと滲んできている粘液、その奥に小さく震えている子宮口は、天使のような少女が隠し潜めている『少女性』そのものだった。

「うふふ、壁がしつとりしてる。上の壁がぼこんって脹らんじゃってるのは、膀胱にばんばんにおしっこが入ってるからよね」

「んっ！ んんっっ！ んむうううっっ！」

全ての守りを剥ぎ取られ、無防備な丸裸になった膣内を指先で撫でられる。ぼっこりと脹らんだ膣の上の方の壁をコリコリと手でマッサージ

される。

「あはゝ っこりしてるゝ ここ、Gスポットねゝ 気持ち良いでしょ？ なんてったって、淫紋の効果でここの快感は2倍になっちゃってるから」

「ううううんっっ！ うむうううっっ！ んうんんんっっ！」

信じられないくらい快感が電気になって背筋を駆け上り、チカッチカツと頭の中で明滅する。

「そして……これが……んふふ……花音ちゃんの子宮。とつても大事な場所の入口」

「んっ！」

「あはっ、柔らかいゝ」

「んんううっっ！」

その上、決して他人に触れさせてはいけない少女の一番神聖な場所まで、くりくり、ごりごりと擦られた。

「指、入るかしら？」

「んんっっ！ んむうおおおっっんっ！」

「あはゝ さすがに無理かなあゝ まだ」

八割の苦悶と二割の快楽の声。それをどう解釈したのか、指をねじ込むことを諦め、一息つく絵里衣。

「さ……て……」

ふう、ふう、と熱く濡れた吐息を漏らしている花音を見つめつつ、部屋の中の戸棚を開けて、色々な器具を少女の枕元に流れて行く。

「これと……うん、これっ。これもいるかな……？」

「う……っ……ううっ……んっ……んう……っ……」

それは勿論、花音に見せつけるためにそうしている。少女の想像力、

不安感を高めるための行為だ。

ピンセット、歯ブラシ、筆、ぼこんと先っぽだけが脹らんだ棒、幾つものポコポコがついた細長い棒、そして二本のコードが映えた小さな機械……。

一体何に使うものかなんて事はわからなかったが、その対象がきつと自分であること、きつと自分にとつて嬉しくはない使われ方をするだろうことは、容易に想像がついてしまった。

「えつとー、スイッチここだったつけ……うん、起動した」

絵里衣はそんな花音を他所に機械を手に取りスイッチを入れ、ぴつ、ぴつ、と機械音声を鳴らしつつ設定を進めて行く。

「電流は……まあ、最初からあんまり強いのはさすがにね……」

なにやら不穏なことを呟きつつ、くすくす笑って。

「ふふ、お待たせ。これはね、こうやって使うの」

そういいつつ、二本のコードのうち一本の先端についた金属部品を花音の小さな乳首——右側の——に押し当てる。

そして、もう一本を——

「びちりっつっ！」

乳房の下あたりに押し当てると、びりつと電気が走った。

「あは♪ いい反応。じゃあ、次はこつちね」

「ううっ！ あううううっつ！ うううんんんっつ！」

あうあうあうあうと首を振つても止まらない。止めてくれない。絵里衣はにこにこ満面の笑みを浮かべ、今度は左側の乳首に——

「びちりっつ！ いちちちちちちちっつ！」

ばちんつと弾ける感じがして、びくんつと腰が躍った。

それは比喻ではない、本当に電気が流れている。その強い痛み、痒み

ともつかない感覚は、弄られたあとの部分をジンジンと疼かせる。

ほんの一回電気を流されただけの左右の乳首はじんじんと疼き、ツンツと硬く尖ってしまった。

「あはつ。乳首気持ち良かったでしょう？」

「うううん……うううんう……っ……うもあ……っ……」

痛い、熱い、じんじんとする。気持ち良いなんて事はない。

「んー？ まだ足りないかなあ」

「んっ！ んんっ！ んむうっ！ んむううんっつ！

んー……っつ！」

「じゃあ、次は……クリトリス♪」

「んー……っ！ んんんんんんんんっ！ んー……っつ！」

（やだ……やだあ……そんなの……そんなのクリトリスに使われたら……）

「さっきの縄渡りでコリコリに磨きあげてるから、きつとすごく気持ち良いわよ♪」

「んー……っつ！」

無駄な抵抗。まともに動かすことも出来ない身体をただジタバタと揺らすだけ。しかも、そのことによつて限界まで押し拵げられた膣口は更に大きくばつくりと開き、ターゲットにされているクリトリスを『ここにありますよ』と教えるかのように突き出す結果になってしまつて。

「んぎっつ！」

ばちんっ！

叩くような音が響いた。

「んにあっ！ んにいいっつ！」

ばちっ ばちばちっ！

更に連続で音が響いた。

「あは♪ クリトリスすっごくおつきくなっちゃった。ああ、花音ちゃんのクリトリス可愛い……食べちゃいたい……」

「んひっつ！」

っんつと尖って大きくなったクリトリスにキスされた。

「んんっつ！ んんんんっつ！」

フェラでもするかのように口の中に含み、舌尖で弄ばれ、軽く歯を立てられ、ちゅうつと強く吸われた。

「は、は、は、はひっ、はひっ、んむうっ……」

その間も連続して電気が流される。クリに、乳首にそして子宮口に――

「んぎっつつ！」

膣奥にある秘密の入口を電気でノックされると、花音は一際大きく全身を震わせた。その刺激に合わせてとろーりと愛蜜が溢れ、気がつけば少女のおまんこはトロトロの大洪水だった。

「ふふ……気持ちよくなっちゃってるよ」

ギャグボールを嘔まされた口から漏れる熱い吐息。浅くて早く乱れた呼吸音。

少女の小さな鼻からはつらつと鼻血が垂れ、その頬は赤く、腫はうるうると、口もとからは涎が零れ、幾筋もの汗が額から頬を伝って滑り落ちていく。

「もっともっと気持ち良くしてあげるわね。花音ちゃんの『気持ち良い』を開発してあげる」

くすくすと笑いつつ、筆を手に取る。よく見るとそれにはべったりと糸を引くような粘液がついている。

「これを、乳首と……」

「んっ！ んうううっ……っ！」

「クリトリス……」

「んむっ！ むんんっつ！ んむうんっつ！」

「それから子宮口に……」

「ん……っつっつ！」

ぺたり、ぺたり、しゅりしゅりと、絵筆を敏感な部分に押し当てられ液体をなすりつけられて、花音はゾクゾクと身体を震わせつつ喘いだ。

「んっ！ んんんんんっつ！ んむうううううっつ！」

（あっつ！ 熱いっつ！ 熱いっつ！）

だが、本番はこれから。少し間を置くと、筆で触られた部分が熱く、じんじんとしてくる。まるでじつくりとローソクの火で炙られるような、徐々に高まっていく熱。

「んんんんっつ！ んんんんんんんっつ！」

「こちら、暴れちゃだめよー。手元が狂っちゃうからね」

「んんんっつ！」

くすくすと楽しい絵里衣に注射器を見せつけられて、花音はびくんつと身体を震わせた。

（な………につ………なに、するの………？）

「ああ………いいわね花音ちゃん。花音ちゃんはそんな顔をしていても可愛いわね」



はぁ  
はぁ

んんん

はぁ  
はぁ

はぁ  
はぁ

はぁ  
はぁ

はぁ  
はぁ

はぁ  
はぁ

はぁ  
はぁ

はぁ

はぁ

はぁ



怯えた瞳。もうやめてくださいと涙を浮かべながらに訴える表情。

「大丈夫よ、ただの気持ち良くなるお薬だから」

「んっ！ いぎっ……！……ぎっ……っっ！」

そのままゆつくり乳首に針を立てられた。

「んんっ！ いぎゅうううっ……！」

つぶんと皮膚が弾け、ずぶりと針が突き刺さる。

「はい、痛くない。痛くない」

そう言われても、じんじんと、ずきずきと、酷い痛みが乳首を襲っていた。

「次はクリちゃんね」

「んんっ!? んんんんっ!? ん……っっ！」

「ほおら、暴れちゃダメ。違うところに刺さっちゃうよ。もつと痛くなっちゃうよ」

「んう……」

予防接種を嫌がる子供を言い含めるような言葉。そんな言葉にだめられてしまうほど花音は幼くなかったけれど、『もつと痛くなる』と脅されてしまうと痛みを堪えぎゅつと目を閉じることしか出来ない。

「んふ、いい子よ」

「んっ……！……くうん……っっ！」

そんな花音を焦らすように、いたがわるようにわざとゆつくり針を刺していく絵里衣。

「んっ……んんっ……んんんんんん……」

（痛い……痛い……痛い……っ……でもっ……なんだか……）

熱い。熱い。熱い。

じんじんとする、ずきずきとする。

「んあっ……あああっ……あああ……っ……」

クリトリスに血流が集まるのを感じて、ぞくぞくぞくっつと身体が震えてしまつて――

「んぴあっっ！」

花音がその感覚に耐えているうちに、殆ど不意打ちで子宮口にも注射を打たれた。痛いとか、苦しいとか感じている間もなかった。

（あ……っ……なにっ……これっ……なにっ……身体……っ……心臓……どくんっ……どくんつて……）

心臓の脈動がどんどん早くなつていく。まるで全力疾走でもしているようにばくばくと動いている。

「は……ああ……んあ……んんん……んんん……っ……」

息が乱れる。空気が足りない。頭の中が真っ白になって、ときおりチカチカと光る。

熱い、熱い、熱い、熱い、熱い、熱い、熱い!!

「んふ、それじゃあまた、電気流すね」

「んんんっっ！」

胸に電極を押し当てられると、ビリビリと痺れた。

クリトリスに、子宮口に押し当てられると、腰が壊れた操り人形みたいに無茶苦茶に暴れてしまった。

「子宮口……開いてきたわね」

そんな花音の耳元で囁く絵里衣。

「これなら子宮の中にも入っちゃうかも？」

「んっ!? んんんん!! んむううっっ! んむああああっっ!」

何を言っているんだろう。先生は何を、そんなこと……そんなこと出来るわけがない。



もはやそんな無茶な拡張をされても、それに反応している余裕もない花音。電極を外されてもお全身を駆け上っている電流に、そして、乳首とクリトリスをバキバキと吸引していくその責めに、ぎゅっと目を閉じぶんぶんぶんと首を振って。

「あはは、そんなに感じてくれちゃうと先生嬉しいなあ」

花音が乱れるさまを見ながら絵里衣はほろっと熱い溜息をついた。

「それじゃあ一回イカせてあげましょうか」

乳首とクリスを吸引しながら貼り付いているニップルドームとクリドームを強引に、無理やりに引っぱって取り外す。

「んぎゅんっつっ！」

外されてもすぐには元に戻らない乳首とクリは、ぶるんぶるんつと震えながら絵里衣を誘う。

「悪い子ね。花音ちゃんはすごく悪い子。先生をこんなに誘惑して……」

「んーんーんーっ！」

勃起した乳首とクリトリスを根元でぎゅつと縛った。

強く縛られすぎたせいでそのどちらもが赤黒く鬱血していた。

「はい、それじゃあ最後のとつておきよっ」

ずぶり

「んいっつっ！」

ずぶりっ

「いああっつっ！」

乳首に無造作に何本か針を突き立てる。クリトリスにも同じようにする。

「はい、電流強くしちゃうわねっ」

「んおあああっつ！ あうううっつ！ いっつ！ あっつ！ あうううっつ！」

バチバチと、乳首とクリが弾ける。ビキビキと鬱血しながら更に大きく、硬く勃起してしまう。

「最後はあ、ここっ」

「ぴっつっ！」

ぽっかりと口を開けた子宮にも電極を突き刺した。それは子宮だけでは収まらず、卵管の奥にまで到達していた。

「ふふ、イッてらっしやい」

「ぴああああああああっつっ！」

バチ バチバチバチバチ！！

子宮が、お腹が弾ける。淫紋と相互にフィードバックしあって、どこまでもどこまで快感が脹らんでいく。クリトリスが爆発しそうなほどにじんじんと痺れて、頭の中は赤、白、黄色と花火みたいに色んな色が弾け、唸り、花音の心をグズグズに、メチャクチャに乱していつて——

「あ……ああ……ああ……あう……あう……」

「花音ちゃんっ」

呼びかけても返事はない。

「おい、花音ちゃんっ」

「う……あ……あう……あ……あ……」

返ってくるのは弱々しい吐息のみ。

「あら、ちよつとやり過ぎちゃったかしら」

反省反省、なんて頭を小突きながら絵里衣は苦笑する。

びりっ！

「びあっつ！」

それでもなお、電流を流してみると花音は壊れた玩具のように反応し、びくんびくんと身体を痙攣させていた。

「あ……そうだ」

そんな花音の様子を見て、ふと気がついたように声を上げる絵里衣。

「あれ、一回やってみたかったのよね」

そういうつつ息も絶え絶えの花音からギャグボールを外してやると、力を失った舌先が口の外についてくる。

「んふ……花音ちゃんの舌、可愛い♪」

それを指で摘まんで愛撫すると、とろーりと唾液が溢れた。口に指を引っかけて押し抜げてやると、柔らかくてトロトロの少女の口内の熱さを感じる事が出来た。

「もうちよつと舌、出してね」

語りかけても返事はない。だから摘まんで引っ張り出す。そして……

指に持ったのは注射器。薬液を満たしたそれを。花音の舌の真ん中辺りの両端、先端に突き刺す。

「あ……うっ……」

これは間違いなく痛いので、さすがに意識を保っている時の花音に使うのは諦めていた。でも、今は絶好のチャンスだ。

「んふ、ごめんね、花音ちゃん」

更に舌を強く引っ張って裏側を露わにして。丁度根元の辺りに他の三カ所よりも多量の薬液を打ち込む。

変化はすぐに現れた。

「あ……えあ……」

可愛らしくて小さな舌が、突然血流が盛んになったように血管が浮き上がり、バキバキに硬く、大きくなっていた。

「んふ……花音ちゃんの舌ちんぽ♪ いただきまーす♪」

ぐいっと両手で少女の口を押し抜げる。すると彼女の舌はさらに突き出されるような形になる。

「んっ……ちゅっ……」

その舌ちんぽに自分の舌を伸ばし、つんつと触れた。

「あ……んっ……」

れろれろると舌を這わせて、ぴちゃぴちゃと溜めてやった。

「ひ……っ……うっ……あうっ……んんっ……」

舐め回す度びくんびくんと脈動する舌。もつと、もつととねだるように差し出されてくる淫靡な肉の塊。

「んっ！」

カリッと先端に歯を立ててやった。

「つつ！んっ……はうっ……」

歯形がつくほどに噛んだ上で、優しくマッサージするように舐めてやった。

「あ……むっ……」

「んっ……ふっ……」

先端を口に含む。

「ぎゅっ……ぎゅっ……ぎゅっ……ぎゅっ……ぎゅっ……」



小鳥の啄みのように舌と歯で刺激してやる。

「んっ……ふっ……はふっ……はふっ……」

半ば意識を失っている状態で、異常なほどに屹立した舌を舐められて、花音は確かに感じていた。可愛らしい声を漏らして、はふっ、はふっ、甘い吐息を漏らして、快楽に震えていた。

「もっ……ふふ……もっ……あける……」

「あ……っ！……んっ……ああんっ……！」

ちゅぼっ、ちゅぼっ、と激しく音を立てる。

ちゅっ、ちゅぢゅっ、と吸いたてて、あむ、あむあむと甘噛みしてやる。

「は……っ！……あ……っ！……あ……っ！……」

「気持ち良い？ 花音ちゃん？」

「あ……んっ……んんっ……きもち……いっ……あ……っ！……」

無意識のうちに快楽を貪る少女。可憐で天使のような佇まいをみせながら、舌だけはそそり立った剛直のようにバキバキに尖らせているその罪深さ、罪悪感。

それは本当に、たまらないほどの快感だった。少女の純真さを貶める行為は、どんなことよりも興奮した。

「ほらっ。ふるふるしてきた。イキそう？ もうイキそう？」

「あ……んっ……あんっ……ああんっ……イ……イキ……そう……で

す……んあっ……！」

「じゃあ、言ってる？ 舌ちんぽでイっちゃうって。先生にフェラされてイッ

ちゅっって」

「あ……わた……んっ……わたし……あっ……んんっ……イキ……そ……

で……あっ……っ！……」

「舌ちんぽ……」

「んあ……っ！……」

恥じらいなのか、よく分かっていないのか、絵里衣が望む言葉を口にしない少女に少し苛ついて、ガリっ、と歯を立てる。

「い……う……あ……っ……ああん……っ……！」

「ほら、もう一回。言ってる。花音ちゃん」

「あ……う……っ……ううっ……んんっ！」

ふるぶると震える少女の身体。はあっ、はあっ、と荒く、早くなつていく呼吸。そして彼女は切なげに、儚げに、熱くて甘い吐息を漏らして、そして――

「イっ……くっ……イっ……ますっ……わた……んっ！……んんっ！……

舌……ちんぽで……っ！……あっ！……イ……っ！……くうううんっ！……」

びくんびくんびくんと震える花音の身体。きゅううっ、と反り返るその背筋。そして、そのタイミング合わせて、びゅっ、びゅっ、と少女の可愛い鼻から勢いよく噴き出す鼻血。

「あら……」

それを顔に受け、うっとりとした表情で――

「花音ちゃんに顔射されちゃったよ」

絵里衣は熱い溜息をつきながら、ふるふるふるっ、と身体を震わせるのだった。

花音の膣口と子宮口を大きくぐばりと押し抜げていた器具を外してやっても、そこはすぐに元には戻らなかった。

ひくひくと蠢く桃色の粘膜を露わにして、とろりとろりと溢れ出る愛蜜がとてもいやらしくて、絵里衣の劣情を誘った。

「ふふ、まだ子宮を弄り足りないかしら」

その様子を都合よく解釈して微笑む絵里衣。その表情は昏く、そして残忍で、まさしく魔女の笑み。

「それじゃあ、子宮をくたくたに溶かしてあげましょうね」

そうして彼女は机の上にあつた小箱の中から何かを取り出すと、それを両手を皿にした状態で花音のところまで運んできた。

「これなーんだ？」

戲けて尋ねてみても花音の反応はない。何度も続けられた絶頂に、すっかり意識が飛んでしまっている。

「あら、無反応。まあいいわ。これ、入れたら嫌でも反応しちゃうわよね」

一瞬つまらなさそうな表情を浮かべた絵里衣だったがすぐに気を取り直すと、ぽつかりと開いた少女の膣口に『それ』を流し込んでいった。

とろが……とぶっ……とぶっ……

手の上にあつた時は粘度があるように思えた『それ』だが、そうしてみると案外サラサラで、勢いよく花音の膣内に注ぎ込まれていく。『それ』

が進入してくる感覚はなんとも表現しがたい味わったことのない感覚で、殆ど気絶状態の花音は、ただ不思議そうな表情を浮かべるばかりだった。

「この子はね、低級の使い魔。女の子の身体を開発するのに特化した……まあ、一応悪魔ね。スライムのスラクくんでも呼んでおきましょうか」

その全てを呑み込んで、しばらくは花音の様子は変わらなかった。ただ、お腹に張られた淫紋が怪しげなピンクの光を放っていて、じんじんと疼くような感覚を彼女に与えていた。

「ああ、大丈夫。スラクくんは身体に悪いことなんてひとつもないから。私

が花音ちゃんにそんな酷いことするわけないでしょう？」

どの口が言うのか。でも、本人は本当にそう思っているようで、しれつとした顔でそんなことを口にする。

「そろそろ子宮につく頃かな？」

そして、絵里衣がそう口にした瞬間――

「あ……っつっ！」

びくんっ！ と跳ねる花音の身体。

「あつ！ ああつ！ んうっ！ んううっ！ おな……かあ……っつっ！」

内側からお腹がぽこん、ぽこんと脹らんで、その動きに合わせてガクガクと腰が躍る。

「ひっ！ あつっ！ やっ！ な……っ！ かあつっ！ しきゅっ……！ なっ！ かあああつっ！」

あつという間に膣を満たしたスライムは、やんわり口を開いた子宮に潜り込もうとしていた。

「今日はスラクくん、随分暴れるわね？」

その様子を見て、少し不思議そうな声を上げる絵里衣。

「ああ、そういうことね」

それから、ぼうつとピンクに光る淫紋を見てぼんつと手を打つ。

「子宮と淫紋がリンクしてるから混乱しちゃったのね」

「あつ！ んつつ！ んあつつ！」

それが花音の身体に更に強い快感をもたらしているのは怪我の功名と  
いふかなんというか。

「ひつ！ ううつつ！ しきめ……つつ！」

きゅうううつと背筋が反り返り、お腹が高々と持ち上げられた。じゅ  
ぷんつ、じゅぷんつと水気を含んだ音が響いて、花音は裏返った艶つぼ  
い声を漏らす。

そして――

「あつつ！」

子宮を満たすスライム。それは更に子宮の中で蠢き、花音の卵管口を  
見つけ出す。

「ひつ！ あつ！ んにあああつつ！ はい……つ……て……つつ！ く  
るつ！ おくつ……に……に……に……つつ！」

そして更にうによんうによんと卵管を押し抜けつつ廻り、卵巣にまで向  
かう。

「や……つ！ やあ……こわ……こわい……つつ！ おく……つつ！ お  
くつ……すぎるう……つ！ やだつ……やあああつつ！」

どこまで潜り込んでくるのか、誰にも触れられた場所に潜り込み、更  
に奥まで向かうとする感触に恐怖が沸き起こる。

「大丈夫よ、花音ちゃん、ただ気持ち良いだけだから」

「びつ！ ぴああつつ！」

ぼくんつと、お腹の中で何かが啜えられた感覚があった。もぐもぐと  
咀嚼され、くちゅくちゅと舂め回され、ぞくんつと子宮全体――花音

の大切なところがジンジンと疼いた。

「どう？ ふふ、まだ産んだことのないタマゴ、食べられちゃう感覚はど  
う？ 気持ち良いでしょう？ すごく悪いことをしてる感じで痺れちゃ  
うでしょう？」

そんな花音の耳元で囁く絵里衣。清く正しい天使の様な少女を墮天に  
誘おうとする魔女の声。

「だ……めつ……」

意味がわからなかったけれど、とてもいけないことをされているのだっ  
てことはわかった。

「わたしのタマゴ、食べちゃ……だめつ……！」

きゅうんつ、きゅうんつと子宮が疼く。それはお腹の淫紋と反応して  
無限ループの感覚増幅を作り出す。

「だ……めつ……なのつ……あつ……だ……めつ……！」

「だーめ、子宮がすぐすぐになるまで許してあげない」

「あつ！ ああつ！ あひつつ！ ひいんつつ！ お腹……つつ！ お腹  
の中、溶けちゃううう……つつ！」

「そろそろいいかしら……？」

頃合いとみて、絵里衣は花音の身体を持ち上げる。反り返っていた身  
体を逆方向に折り曲げて、小さな子供におしっこをさせるようなポーズ  
で抱え上げる。

「んふ……おまんこがトロトロになるのにはもう少しかかるから……お尻  
の穴で我慢してね」

「やつ……！ だめ……つ！ んつ……！ だめ……つ！ ですつつ！

お尻だめつつ！ お尻やだあつつ！ またおかしくなっちゃうつつ！  
なっちゃうからあつつ！」



「先生は花音ちゃんにおかしくなって欲しいんだけどなあ」

「だめっ……だめっ……！ えっ……あっ……！ えううっっ！」

舌を摘まみぐつと引つ張り出した。そこにクリップをつけ紐を伸ばしてクリトリスに結び付けた。

「ああっ！ えあっっ！ えっおあああっっ！ んっ！ えうっ！ えうあああっっ！」

「ふふ……そんなに舌動かしちゃって。クリトリス、物足りなかった？」

花音が驚き悲鳴を上げると舌の動きがダイレクトにクリトリスに伝わり、少女はぞくぞくと震えてしまう。

「花音ちゃんもノリノリなんだ」

「ひあ……っ！ ひ……がっ！」

「恥ずかしがらなくても良いのに。協力的で先生とっても嬉しいわ」

「ひが……んひっ！ ひが……っっ！」

「うん、それじゃあ花音ちゃんのリクエストに応えて……お尻、入れちゃうね」

「えっ……！ あっ！ えあっ！ いっっっ！ いひいひいっっ！」

ぶぶぶぶぶぶぶ

信じられないくらいに勃起した絵里衣の怒張をすんなりと、ずぶずぶと呑み込んでいく花音のアナル。

「あはっ……お尻はいい子。すごく素直。でも、おっぱいはあんまり素直じゃないわね」

「んっっ！ んにあああああっっ！」

ニップルドームで引っぱられ、パフイニップル気味になった乳首をぎゅ

うっつと抓りながら強く引つ張る。

「んっ！ んんっっ！ あっっ！ んあああっっっ！」

スライムに満たされパンパンになったお腹がふるんと揺れる。引つ張り出された舌からばたばたと涎が垂れる。舌に引っぱられる形になっっているクリトリスは真つ赤になっぴくんと震えていた。それは可憐な少女に生えたペニスだと言っつてしまってもいいようなくらいに腫れ上がっていた。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっっ！」

そんな花音の小さな身体をばちゅんっ、ばちゅんつと突き上げる。小さな尻穴をぐりぐりと抉りかき混ぜながら犯していく。

「ふふ……そろそろかな……」

「んっ……！ ああああっっ！」

ずんつと強い突き上げ。それに反応し、裏返った高い声を上げる花音。その勢いでペニスは一気にS状結腸を突き抜けて、手間にあるヒューストン弁がくぼんっ、くぼんつと間の抜けた音を立ててかき混ぜられる。

「あっ！ ああっ！ ああああっっ！ とけっっ……るっ！ とけるううっっっ！ とけっっ！ しきゅっ！ とっ……けっ……！

あっ！ ああああああっっ！」

ずるんっ、と、花音の子宮を犯していたスライムが膣口から顔を出した。「ひっ……！ あっ！ だっ！ めっ！ でちゃっ！ だめっっ！ だめっ！ だめええええええっっ！」

そう言っつてみたところで止まりはしない。ずる、ずる、どぶん、どぶんと勢いよくスライムは溢れ出し、それに合わせて少女のお腹もへっこんでいく。

だが――







「うえっ！ えあっつ！ えう……っつ！」

だが、不満げにずんつと腰を使われペニスを喉の奥に突き入れられて、げふつ、ごぶつとむせてしまう。

「あは……っ……そうそう……舌動かすの上手……もつと……うん、そんな感じ……れるん、れるんって舌を絡めるみたいにして……」

「んっ！ んんんっつ！ んうううんっつ!!」

満足のいく刺激を花音を与えてくれて、絵里衣はご褒美とばかりに花音の子宮へのキスを再開した。コリコリとしたこの吸盤のような感触の子宮口に今度はまるでディーブキスをするかのように舌をくりくりとして、ゆっくり、ゆっくりと口を開けさせていった。

「んんっ！ んむううんっつ！」

ぬるんつと舌を中に入れてやると、無茶な姿勢で折れ曲がった花音の身体が激しく痙攣した。

「ふふ……きもちいーね♪ 子宮、とろけちゃってるもんね？」

一度口を離してくすつと声を漏らして、そして改めてキス。もうすつかりトロトロになつている子宮口は簡単に絵里衣の舌を受け入れ、きゅつ、きゅつと締め付ける。

「んきゅっつ！」

そんな花音の子宮の中をれるれろと舐めながら、かぶつと優しく歯を立てた。

「んにっ！ んにあああっつつ！ んんっ！ んううううっつ！」

あむあむあむと甘噛みされると、バタバタバタと足が暴れてしまう。その上更にちゅっつ、ちゅっつと強く子宮を吸い立てられるといっそう激しく身体が跳ねた。

（だ……めっ……んっ……だめっ……こんなの……んっ……こんなの……

気持ち……良すぎて……)

お腹の奥から快楽が全身に染み渡っていく。頭の中はチカチカとして訳が解らなくなっていた。そして、お腹に貼り付けられた淫紋が熱く疼き、身体の外に飛び出てしまった子宮とリンクして、もう、身体全体、全部の全部が気持ち良すぎて何にも考えらなくなってしまうて……

（わたし……わたし……っ……もっ……だめっ……)

「~~~~~」

ガクンガクンガクンと全身が無茶苦茶に暴れる。壊れたマリオネット人形みたいに手足がバラバラに動く。

「んくっ……あっ……はっ……先生も……射精ちやう……！」

「~~~~~」

花音の喉の奥深くに沈みこませた肉棒から、絵里衣は激しく、熱いマグラを噴き出させた。

「あっ……あはあ……射精……んっ……いっぱい射精ちやうっ……！」

しばらくの間余韻に浸り、ぞくぞくと身体を震わせる絵里衣。それから花音の子宮に挿入していた舌を抜き取ると、唾液とまじって泡立った子宮頸管粘液がびゅつ、びゅつと子宮口から迸る。

「あんっ……ふふ……花音ちゃんも射精しちゃったね？」

顔にべつたりと付着したそれを指ですくい舐めとつて、くすくすつと絵里衣は妖艶な笑みを浮かべた。

「あ……うう……あ……せ……せんせ……」

花音が窒息してしまいそうな程に精液をぶちまけても、まだ絵里衣の昏く燃える情欲に終わりは来なかった。

「ああ……悪い子ね、そんな顔で先生を誘って……先生、またあなたをぐっちゃぐつちゃにしたくなつちやうじゃない」

「んくつ！ くろうんつ……！」

瞳を爛々と輝かせながら、絵里衣は花音の肩口に歯を立てた。

「ああ……美味しい……花音ちゃんの汗……血も美味しい……」

「あうつつ！ いっ……！ たっ……！ せ……せんせ……いた……いた

いっ……」

「がりっ」

「うあつ！ ううああんつつ！」

苦悶に歪む少女の顔。だけど絵里衣はそれでも歯を立てるのを止めない。肩口だけでなく首筋、腕。そして乳房にまで痕を刻み込んでいく。

ほつそりとした白い肌に血が滲んだその様子は、ひどく残酷に感じると共にたまらないほどに美しくも感じ、更に絵里衣の嗜虐心を燃え上がらせていった。

「ねえ、花音ちゃん。入れていい？ 入れていいわよね？」

「ふえ……入れるって……どこに……？」

「決まってるじゃない、そんなの。くすつ……子宮のナカ」

「ひ……っつ！」

口もとを吊り上げ、凄惨に微笑む絵里衣。彼女はぶるんつと飛び出た花音の子宮をぎゅつと掴み、そして――

「む……り……むりです、せんせ……あつ……そんな……入らない……」

少しだけ口を開けた子宮に肉棒を押し当てる。その太さは花音の子宮よりも明らかに太い。

「大丈夫……うん、大丈夫。だつて、花音ちゃんは頑張り屋さんだもんね」

「あ……ああ……ああああ……っん！ んにいいいっつ！」

だが、絵里衣は花音のささやかな抵抗を押し切つて、無理やりにペニスをねじ込んだ。瞬間、花音は悲しげな声を上げて、びくん、びくんと身体を震わせた。

「あ……ああ……あああ……ふと……んつ……ふとい……よお……っ……」

震える声、子犬が鳴くような悲しげな声。

「うふ、うふふ……素敵……花音ちゃんの子宮のヴァージン貫つちやつた」

「いっ……！ ううつ！ さけ……るう……っつ！ 裂けちやうつ！

あつ！ あああつつ！」

キツキツの子宮が、絵里衣の亀頭をぎりぎり、ぎゅうぎゅうと締め付けた。

「あは……このまま臍内に戻してあげるね、子宮押し込んであげる」

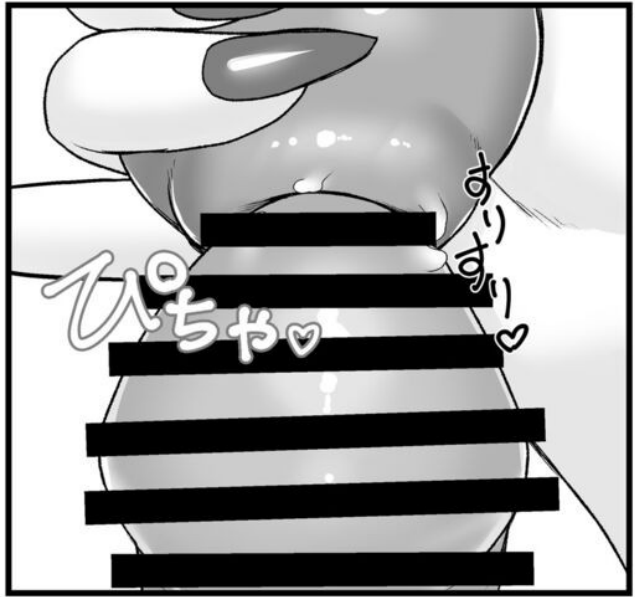
「んひっ！ ひっ！ ひいんつつ！ あつ！ んあああああつつ！」

その締め付けられた状態でピストン運動をすると、じゅぽんつ、じゅぽんと派手な音を立てて、子宮ごと少女の臍内を掻き回す形になった。

「やあ……っつ！ やあああつ……！ だめっ……だめえ……こわれ……

ちやうう……っ……っ……！」





「ん……」

目覚めは最悪だった。

「いつ……たつ……」

覚醒したと同時にズキンと頭痛。

「あ……う……う……」

まるで二日酔いの朝みたいなげんなりとしてしまう気分。

「そっか……昨日は『魔女の目』だったわね……」

『魔女の目』の次の日は大体こうだ。目覚めは最悪だし、身体中がバキバキに硬くなっている。知らないうちに怪我をしていることもあって、生徒に心配されてしまったこともある。

「んっ……とりあえず……シャワーでも浴びよ……」

酷く汗をかいていたし、なんだかすえた匂いがした。汗だくのまま寝てしまったのか、身体中から悪臭が漂っている気がした。

「あれ……？」

そこでふと、気がつく。

「ここ……ここ……」

ここは自分の部屋ではない。でも、だったら……。

「ホテル……？」

思い当たったのは、以前よく使っていたSMプレイ専門のホテル。器具や撮影機器がやたらと充実していて、思いつく事は大抵何でも出来る。だけど、ここに入りにしていたのは女の子を手当たり次第つまみ食いし

ていた時期のことで、最近はその存在も忘れるほどに疎遠になっている場所でもあった。

「なんで私、こんなところに……？」

『魔女の目』に起こったことは記憶に残らないことが多い。だからうっかり何をやらすかわからなくて、仕事も休んで引きこもることにしている。だけど、そのはずだったのに自分は家を出て、当時ろくでもないことに使用していた場所にいた。

それは、何故……？

「……」

ひどく嫌な予感がして、絵里衣はゆっくりと後ろを振り返る。すると――

そこにあつたのは、目を覆いたくなるような光景だった。

ぎつちりとときつく緊縛された花音が、巨大なアナルディルドウの上に腰かけていた。いや、違う。これは深く、横行結腸に届くまでねじ込まれているのだ。そして、膣口からは子宮の中まで届くアタッチメントがついたマッサージ器を押し込まれ、花音のお腹……おへその上辺りまで不自然にぼっこりと膨らんでいる。口には開口具が嵌められ、可愛らしい舌を引っ張り出されている。沢山鼻血を出してしまったのだろう。その口枷にせきとめられる形で、生乾きの血が筋を作っていた。

腋と二の腕、太ももの内側、そして下腹部には電気パッドが貼り付けられ、今もお少女の身体をびくんびくと震わせている。そして絞り出され鬱血した乳房は、一体何をされたのだろう、いつもならば虫刺されほどの可愛らしい乳輪なのに、まるでパフィニップルのような、ぶるんとした様相に変わっていた。その上、その乳房を貫くように二本、三本、四本。電源に繋がった針が刺さっている。しかも丁寧な左右ともに。ク





花音が苦痛に呻いているさまを録画していたことに気がついて、カメラをなぎ倒した。

直視できないほどに眩しい、天使の笑みだった。

「ごめん……花音ちゃん、本当にごめんね……」

そしてようやく全ての拘束、全ての器具を取り外し、ギョツと抱きしめる。ごめんねって、くしゃくしゃになつて待つている髪の毛をなでる。

「せん……せ……っ」

すると、花音は息も絶え絶えながら不思議そうに声を掛けてくれた。

「どうしたの……どうして……泣いてる……の……っ」

「それは……だつて……」

言葉が出て来ない。

何を言えいいのか分からない。

謝るっ

ここまでのことをしておいて謝るくらいで許されるとでも？

自分なんかもう、死んじやつた方が良いんじゃないか。

そこまで考え、言葉に詰まっていると――

「だ……い……じ……よ……」

震える手が絵里衣の頭に伸ばされる。

「だ……い……じ……よ……う……ぶ……」

弱々しく、だげどにこつて微笑んでくれる。

「花音ちゃん……私……」

その後はもう、言葉にならなかつた。ただ嗚咽だけが零れてきて、ぎゅうつと花音の身体を抱きしめた。

そんな絵里衣の頭を花音は優しく、なでなで、なでなでとなでて……。

「えへ……へ……いつもの先生だあ……」

随分と憔悴していたけれど、それでもその笑みは――

終

花音ちゃんであ・そ・ぼ♡

くふたなり魔女先生♀は

天使な花音ちゃんをぐちよんぐちよんにする夢を見るか

発行日 二〇二三年八月一三日

発行 不可思議

印刷 大陽出版株式会社

文 玉沢円

イラスト 双木こじろ

デザイン 双木こじろ

編集 玉沢円

fukashigi@mac.com (e-mail)  
@tamasawatubura (Twitter/X)

Fantia

pixiv FANBOX





# 不可思議

FUKASHIGI

